

319.382

H869s

布施勝治著

ソウエート東方策



\*0011246000\*

0011246-000

319.382-H869s

ソウエート東方策

布施勝治・著

燕塵社

1927 5版

ABJ

319.382

H869s

布施勝治著

ソウエード東方策

贈呈

希施勝治



この圖畫は本館編集立役者吉岡主査 故能勢寅造氏の遺贈にかゝるものである。(1957年12月)

布施勝治著

ソウエー卜東方策

正誤表

誤	正	頁	行
<p>宣傳機關 チエンパレン卿 干渉論・傍觀論 餘儀なくなされた ベラ・クレーン 已にレーニンの云へる如く その文及び 邦聯 最先進國 一脈のの 問順 チエンパレン卿 曰く「あれば、 エウエル・パシヤ 駐露近中東三國大使 危殆 ロシア 實物宣傳 蒙古國民黨 大統領 依頼 各都市 効力を失すること 向つて左より左へ 大盟 唯物主義 事績 任する能はず 憲法にあつて 面して 共産黨 官僚 又政治的に 激勵 手耳 チチエーリン チエンパレン卿 無階級 たかたら</p>	<p>宣傳機關 チエンパレン 干渉論、傍觀論 餘儀なくなされた ベラ・クレーン レーニンの余に語れる如く その文化及び 聯邦 最先進國 一脈の 問順 チエンパレン 曰く「あれば、 エンウエル・パシヤ 駐露近中東三國大使 危殆 ロシア 實物宣傳 蒙古國民黨 大統領 依頼 各都市 効力を失すること 向つて右より左へ 六盟 唯物主義 事績 任する能はず 憲法によつて 而して 共産黨 官僚 又政治的に 激勵 手耳 チチエーリン チエンパレン 無階級 たかたら</p>	<p>目次六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇</p>	<p>一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇</p>

319.382

14869A



447396

## 序

近頃、ソウエート政府の東方策、即ち所謂東洋「赤化」政策は、漸やく、日本の識者間にも、眞面目に、論議されるやうになつた。しかし「赤化」とは、抑も何を意味するか。あらゆる現状打破運動を指して云ふか。或は嚴格に「共産主義化」を意味するか。或は又、單にソウエート・ロシアの勢力の延長浸漸を指して、これを云ふか。未だ、判然たる定義を下したものが無い。

一方、ソウエート「赤化」運動を目して、思想のかたまりぬ學生や、労働者の雷同的騒動ぐらゐに見くびつてゐるものもあるが、同時に又、他の一方、「赤化」運動とさへ云へば、直ちに現状破壊の脅威となし、無暗にこれを恐怖するものもある。そのいづれを是とし、いづれを非とすべきか。或は兩者とも、あやまつた見解とすべきか。ソウエート東方策の要諦は抑も那邊に存するか。「赤化」運動の眞意義は如何。これ實

に、われ等の目前に横はる最も興味ある問題である。

著者は幾度か「赤化」の根據地たるロシアに遊び、又「赤化」の浸漸せる幾多東洋諸國を歴遊し、聊かこの問題について研究するところがあつた。

たゞ著者は、新聞記者たること十數年、その間、多くは戦争、革命、その他の事變の地にあつて、靜かに讀書し、研究に没頭するの時を得なかつた。従つて、本書も、學究的の著述と異り、資料の蒐集や、記事の編纂等に疎漏があるかも知れぬ。しかしそのかわり、本書の所説は、悉く著者が、親しく事變渦中の人と語り、自らその現場地を跋涉し、得たところのものである。

例へば、本書中に見ゆる重要人物は、レーニンを始め、スターリン、トロツキー、チチエーリン、ヨッフエ、カラハン、吳佩孚、馮玉祥、張作霖等すべて、著者が親しく面晤せる人であり、又本書の關係地たるロシアは著者が十年の歲月を送つたところ支那は著者の現任地、その他トルコ、ベルシア、コーカサス、蒙古等も亦著者の足跡

を印したところである。著者の切望するところは、讀者が本書を以て「學究的机上の議論」となさず、「事變を目撃した新聞記者の體驗記」として讀まれんことにある。

日本の立場から見て、利害關係の、最も緊切なるは、云ふまでもなく、極東、殊に支那である。しかし、ロシアの「赤化」東漸は、先づ露國領内の東洋民族に始まり、次いで近東から中東に及び、最後に極東に漸進して來たものである。コーカサスとトルキスタンの「赤化」を究めずして、近東及び中東の「赤化」は論せられない。と同様に、トルコ、ベルシア及びアフガニスタンの「赤化」の經過をたどらずして、印度蒙古及び支那の「赤化」を知るは至難である。

本書は、即ち「赤化」政策の本尊レーニンの抱負、及びスターリンの經綸より説きおこし、先づソウェート聯邦内の東洋民族について論じ、近東及び中東に移り、最後に極東の「赤化」問題に論及するの順序をとつた。

最後の二三篇は主觀論に走り過ぎた嫌ひがある。切に讀者の批判を請ふ。

著者は一昨年の訪露に際して、父を喪ひ、昨年の訪露直後に、母に逝かれた。本日は恰かも亡母の一週年忌にあたる。謹んで此の書を亡父母の靈前に捧ぐ。

大正十五年十月一日

北京にて

著者識

## ソウエート東方策目次

- 一 六年前訪露の回顧……………一  
レーニンとの談話・「西洋を埋める東洋の穴」・モスクワの外賓  
宿舎生活・レーニン傘下に集れる東洋革命志士・最初の東洋民  
族大會・世界革命強襲戦の失敗
- 二 ボリシエウイキーの二大標榜……………二〇  
レーニンの二大失策・革命の「戰畧的退却」・資本主義の安定  
赤露白化説・世界列國の五大反目・赤白兩立不可能論・帝國主  
義の「正面」と「背面」・西守東進策
- 三 ソウエート民族政策……………四三



第二及び第三インターナショナルと被壓制民族・世界革命の「豫備隊」・スターリンの二大民族政策

四 聯邦内東洋民族の自治政治……………五六

放膽なる民族自決主義・分裂離散から聯合團結へ・勞農同盟條約ソウエート聯邦の建設・トルキスタンの砂原に二共和國の出現民族平等主義の徹底・勞農兩院制度

五 露領アジアの文化的復興……………八一

埋没せる民族の蘇生・トルコ語のローマ字採用・雜誌「新東洋」中央アジアに新文明國の建設・ソウエート大會傍聽の印象・アジア化するロシア・「赤化」の「實物宣傳」

六 トルコ革命とロシア……………一〇二

歐洲大戰後のトルコ・オットマン帝國を葬る前の弔鐘・英國の四海征服計劃・ケーマル・バシヤ・希土戦争とロシアの對土援助・露土同盟條約・「双頭鷲」と「鎌と槌」・トルコ「赤化」の限度・トルコ政治の民主化・露土保障條約・露土の文化的接近

七 ペルシアにおける英露の角逐……………一二二

回教僧侶の跋扈と英露の侵畧・英國のペルシア併呑計劃の失敗  
ロシアのペルシア「赤化」策・テーラン政變・「支那の縮圖」リザ・ハンのクーデター・ペルシア共產黨・ペルシア移民の「赤化」・ペルシア旅行の印象

八 アフガニスタンの對英奮闘……………一四五

「印度の門戸」・英國のアフガニスタン侵畧・露ア條約・エンウエル・バシヤの反ソウエート運動・カーゾン卿の最後通牒・近

東及び中東三國に對するソウエート政策の比較・三國大使との  
談話

## 九 失敗に終れる印度革命 ……一六四

レーニンと印度革命・革命可能の理由・革命失敗の原因・ガン  
ヂーヅムとレーニニズムとの抵觸・マクドナルド内閣の印度政  
策・強襲作戦より「赤化正攻法」へ・近東及び中東より極東へ  
の方向轉換

## 十 内外蒙古の『赤化』……一七七

蒙古旅行の印象・半開國民と急進思想・土地所有權の觀念なき  
蒙古牧民・蒙古革命の二大中堅||蒙古國民黨と蒙古青年革命團  
蒙古國民政府とその政綱・大小國民議會・蒙古勞働國民權と蒙  
古憲法・駐露蒙古大使との談話・露支蒙國際關係・露蒙修交協

定・烏梁海國民共和國・蒙古の文化的「赤化」・蒙古鐵道密約  
說・變通自在のソウエート對蒙策・頓挫せる内蒙革命

## 十一 『赤化』運動渦中の北京 ……二三五

最初の「赤化」使||ユーリン・ヨッフエと馮玉祥及び廣東政府  
カラハンの來東・最初の對支聲明・露支及び日露條約の締結・  
五卅事件とボリシエウイズムの宣傳標語・失敗せる民衆クーデ  
ター||ソウエート巨頭の北京來集・國務院の大慘劇・國民軍の北  
京撤退

## 十二 廣東とモスクワ……二六六

孫文とレーニン・廣東の瀕踏み・ヨッフエと廖仲愷との會見・  
ボロヂンの建策二つ・ロシア革命の經驗・軍官學校の設立・學  
生軍の初陣・黨代表制の採用

十三 支那國民黨と共產黨……………二八六

支那共產黨とコムイテルン・國民黨への割込運動・國民黨の内  
訌分裂・「廣東政變」・兩黨の妥協策・兩黨の主義と政策の比較  
國民黨左傾の動機・商團政府の建設計劃・國民革命迄での共同  
作戦

十四 支那の反帝國主義運動……………三二〇

國民黨の對句標語「帝國主義の打破」と「軍閥の倒壊」・反帝  
國主義運動大聯盟・全國學生聯合會・十九世紀のロシア學生と  
今日の支那學生

十五 所謂『對支宣傳機關』……………三四四

シノウイエフの失脚・第三インターナショナルの勢力凋落・プ  
ロフィンテルンの活動時代・クレステンテルン・「支那から手を

のけよ會」・孫逸仙大學

十六 赤白分野状態の支那軍閥……………三六四

五大軍閥の亂闘・張作霖とロシア・郭松齡の叛起・吳張の聯盟  
吳佩孚の「赤化」論・ソウエート政治家の吳張馮論・馮玉祥の思  
想モスクワにおける馮玉祥・露馮密約説・蔣介石の抱負・北伐  
軍の長江進出・「赤化」の最大援助

十七 白赤兩大關の英露對抗……………四一二

東洋の三局面・東洋「赤化」の二大目標・カーゾン卿の最後通  
牒・チエンバレン卿の西歐赤化防止策・「チチエーリンの目的」  
對支「赤化」策の成敗原因・二様の日本觀・對滿洲策失敗の教  
訓

十八 『赤化』對策如何……………四四〇

「赤化」の前例・赤派勢力の弱點と強味・「赤化」の限度・スター  
リンとトロツキーの「アジア人のためのアジア」主義觀・對策  
三論Ⅱ干涉論・傍觀論及び利用論

卷尾に

……………四六七

第十五次全聯邦共產黨大會・アジア民族聯盟運動・露土外相の  
交驩・支那國民革命軍の北進

目次(終)

ソウエート東方策

大阪毎日新聞 記者 布施勝治 著  
東京日日新聞

一 六年前訪露の回顧

レーニンとの談話・「西洋を埋める東洋の穴」・モスクワの  
外賓宿舎生活・レーニン傘下に集れる東洋革命志士・最初  
の東洋民族大會・世界革命強襲戰の失敗

一  
今から六年前、一九二〇年六月四日、私は赤都モスクワで、クレムリン宮城にレーニンを訪ねた。

二  
当時の私とレーニンとの談話は、レーニンが、日本の新聞記者と語った最初のものとして、現に「レーニン博物館」で蒐集してあるレーニン研究資料の記録中に入れられ、最近モスクワで發刊された「レーニンと東洋」と題する冊子の中に載せてある。この談話中、東洋「赤化」の聲益を喧しくなつて來た今日、殊更らに深い感興をもつて思ひおこされるは「東洋と西洋と、どちらが、 Kommunizmus の成功の機會が多いか」との私の質問に對するレーニンの左の答である。

レーニン曰く、

「眞正の Kommunizmus は今のところ、西洋にしか成功し得ない……。しかし、西洋の列強は、東洋弱少國の搾取によつて、自家の富を増しつゝあるが、これと同時に



レーニンの談話振り……（著者はこの室内、この机の側で、この巨人と語つた。）……

に、彼等はまた、東洋の殖民地を武装し、兵をねらしめ、以て、西洋は東洋に於て自ら己を埋める穴を掘つてゐる……」。

その後、六年たつた今日、レーニンは、志半ばにして、病のために倒れ、今やモスクワは赤色廣場の靈廟の中に、木乃尹となつて居るが、彼の私に與へた前記の答は、今から顧みて、まことに、レーニンの後世にのこした「豫言」の一つと見なければならぬ

## 二

レーニンのいへる「東洋殖民地の武装」と「西洋を埋める東洋の穴」とは、抑も何を意味するか。

歐洲大戦争の末期、歐洲列強は、その兵力補充の途に窮し、つひに殖民地において、有色兵を募集した。英國は印度、フランスはモロッコ、印度支那などで殖民地軍を編成し、之れを訓練して、歐洲戰場に繰出した。かくして、歐洲戰場における白色人種の同志打ち戦争に、東洋の有色人種が、不本意なる参戦を餘儀なくなされた。しかし

是等の有色軍は、一度、歐洲戰場からその故國に歸るや、やがて、その壓制國に對する反抗運動の急先鋒となつた。殊に印度では、英國が歐洲戦争参加の報酬として約束せる印度自治の實行を躊躇するや、一九一九年から一九二一年にかけて、對英反抗の大動亂が頻發した。

又最近のモロッコ叛亂において、アブデル・ケリームが、一年余にわたり、フランスとスペインの聯合軍を相手に、悲壯なる孤軍奮闘をつゞけ、アフリカ土民のために萬丈の氣を吐いた如き、又實に、レーニンのいへる如く、歐洲列強自ら、印度人や、モロッコ人を武装し、その兵をねらしめ、無理に歐洲戰場にたゝしめた不慮の結果に外ならない。

更らに又、歐洲列強はその殖民地の産業開發のために、資力を投じ、鐵道を布き、各種の工場をおこしつゝあるが、資本の投下と、工業の勃興には、必らず、労働階級の勢力増進を伴ふ。殊に印度の現状はその最も顯著なる通例で、英國の投せる資本は

いつの間にか、印度各地の都市に煙突を林立せしめ、この煙突から吹き出す煤煙の下には、無数の労働者が日毎に増加しつゝある。而して、印度に動亂の火の手のあがる時眞先きに、その先頭に立つものは是等無数の労働者である。レーニンのいへる「西洋が東洋において己を埋めるべく掘りつゝある穴」とは、即ちこれを指したものである。殖民地の外、從來殆んど歐洲列強の屬領状態にあつたトルコ、ペルシア、及びアフガニスタン等の被壓制國も亦、歐洲大戰後、歐洲列強、殊に英國の勢力に反抗して起ち、數年間に互る奮闘の後、つひに完全にその獨立を恢復した。

支那における帝國主義反對、不平等條約廢棄等の排外運動に至つては、近頃益々その火の手をあげんとし、歐米列強の當局をして、頻りにこれが對策に腐心せしめつゝある。

レーニンの「西洋においては成功可能である」と云へるコンミユニズムは、今尙ほ「尙成功のめどがつかさうもなく、前途甚だ遠遠の感があるが、東洋における歐洲列

強の勢力は、たしかに下り坂にある。レーニンのいへる「西洋を埋める東洋の穴」の日を遂ふて、大きくなりつゝあるはわれ等目前の事實である。

## 三

一九二〇年の訪露について、も一つ私の記憶に深く刻まれた印象は、當時モスクワにおける「赤色旅舎」の生活である。この頃のモスクワは、今とは違つて、あらゆる舊い制度を破壊し、極端な共產制度を無理おしに勵行した時で、ホテルの如き資本主義的營業は一軒も開業して居なかつた。外國からの來客は、勞農外務省專屬の所謂「赤色宿舎」にとめられるのであつた。私の投じたのは、二三西洋人もとまつて居たが、主として東洋諸國からの來客をとめるところで、支配人が兵卒上りの共產黨員で、玄關にはいつも、つけ劍した番兵が立つて居た。

私のモスクワへ着く少し前に、アフガニスタンの特使が、この宿舎に泊つてゐたと云ひ、私の隣の室には、當時なほ同特使の隨員が二人残つてゐた。その又隣の室に

は印度人、向ひ側にはプハラ人と、シヨルジア人とがとまつてゐる。廊下へ出て、食堂へ行つても、あふ人の多くは、黒髪、黒眸の黄色人か、もしくは黒色人である。「赤いロシア」へ来て「黄色」もしくは「黒色」の旅客と同宿は、いさゝか意外であつたが、そのおかげで、當時のモスクワ滞在二ヶ月の旅舎生活は、私のために頗る有益な智識を興へた。私は實にレーニンの旗下には、せ、参じた幾多東洋各國の革命志士と同宿してゐたのである。

たゞ私だけは、ひとり非社會主義の新聞を代表して來た記者であつて、彼等にとつては全くの異分子であつた。殊にその當時は、尼港事件でモスクワ當局の對日感情が極度に悪化した時であつたので、私は常に何となく身邊の低氣壓を感ぜざるを得なかつた。或は私に對しては、裏面において特殊の取扱ひをしてゐたかも知れぬ。即ち最初は同宿の或朝野人の共產黨員、次ぎには、ロシア人の學生などをよこして、ひそかに監視の眼を光らしてゐたやうにも思はれる。しかし、當時、私の入露には「新聞

記者としての執務には干渉せぬ」との條件があつたので、私の行動に對しては、見張りこそすれ、これに對して妨害を加へるやうなことはなかつた。むしろ、當局の訪問や、資料の蒐集については種々の便宜を興へてくれた。殊に同宿の東洋各國からの來客とは、朝夕、起居をともし、同じ卓子をかこんで「一つ釜の粟飯」を食つて居たのである。そしてこの間、私は毎日彼等の抱負と計畫、即ち「東洋革命の陰謀」を聞かされた。殊に隣室のアフガニスタン特使の隨員から聞いたソウエト政府とアフガニスタンの關係及び兩國の印度革命計劃などは、最も強く私の興味をひいたところである。

## 四

或る日の晩、一人の印度人が私を訪ねて來た。それは、印度革命の志士ボルカッタである。ボ氏曰く

「我等印度革命の志士は、最初日本の援助によつて、印度革命を畫策した。余はし



ばく日本に行つて、大隈侯その他の名士を訪ね、日本の援助を得んとして、百方奔走した。しかるに日本は、日英同盟に拘束されて、印度革命の援助どころか、却つて英國を扶けて、印度革命鎮壓の義務を負ふて居たやうな次第で、我等の日本における革命は、悉く失敗に終つた。こゝにおいて、我等は今や方向を轉換し、ソウエト・ロシアに來たり、レーニンの援助をかりて、我等の初志を遂げんとしてゐる。云々」。

同宿客の中には有名なコーカサスの共産黨首領ナリマノフも居た。當時の彼はその故國のコーカサスを英軍に奪はれて、失意の境にあつた。

私は今もなほ、當時のことを思ひ出す毎に、旅舎のウエランダの片隅で、籐椅子に腰かけ乍ら、沈思に耽つてゐたナリマノフの風貌が、あり／＼と目の前に見へるやうな心地がする。彼の顔色は、日々コーカサスから來る戦況報告によつて、或は陰鬱となり、或は歡喜の色に輝いた。當時、コーカサスでは、英軍が「石油の寶庫」たる

バクー市を手に入れんがため、ジョルジア軍の尻押をして赤色軍と戦つてゐたのである。そのうちに、ナリマノフの姿が、突如として、われ等の旅舎から見えなくなつた。間もなく「バクー奪還」の捷報がモスクワにも傳へられた。ナリマノフは、この報を手にして故國にはせつけ、コーカサス共和政府をうちたて、自らそのソウエト議長にあげられたのである。その後、同共和國のソウエト聯邦に加入するや、彼は更らに一躍してソウエト聯邦の中央執行委員長（即ち勞農大統領）の一人になつたが不幸にして一昨年暮、得意の絶頂時に病没し、昨年、私がモスクワに行つた時には、彼は己に赤色廣場のレーニン靈廟のわきの新らしい墓標下に靜かに眠つてゐた。かくて、私は一九二〇年のモスクワ滞在の旅舎生活中、居ながらにしてソウエト政府と東洋各國の革命運動との關係について、幾多興味深い智識を得ることが出來たのである。私は、その當時から、既に、レーニン等の肚裏、たしかに東洋革命の計畫が企てられつゝある、ソウエト革命は、近き將來、東洋に向つて、大いにその勢力

を張るであらう、モスクワは、たゞに革命ロシアの首府たるのみならず、トルコ、ペルシア、印度、支那等の革命運動の策源地となるであらう。ボリシエウイキーは、必然東洋民族獨立運動の牛耳を握らねばやまぬであらう……との強い印象に打たれてゐたのである。私が特にソウエート東洋政策に對して、深い興味をおぼえ、これが研究に力を入れたのも、決して偶然のことでない。一九二〇年モスクワにおける東洋革命志士との同宿の如きは、その動機の最も大なるものである。

## 五

同年私がソウエート・ロシアを去り、日本に歸つてから間もなく、是等モスクワに集まつた東洋革命志士は、ボリシエウイキーの巨頭ジノウイエフ。ラデツク。ペヲ。クーン等と共に、バクーに行き、九月一日、同地において、最初の「東洋民族大會」を開いた。

同大會にはロシア。トルコ。支那。印度。ペルシア。アフガニスタン。ヒールワ。ブ

ハラ。ダゲスタン。アルメニヤ。アゼルバイジャン。ジョルジア等三十餘種の東洋民族代表が列席し、その中にはトルコのエンウエル。バシヤも加はつてゐた。開會の劈頭、コーカサス・ソウエート政府の首相ナリマールノフは主人役としての挨拶において「人類の搖籃地たる古き東洋は今や永い間の屈辱から、回復勃興の氣運に際會した。東洋諸國が歐米の帝國主義と、資本主義の羈絆から脱却して、その自由を得る日が近づいた。われ等は一齊に覺醒し、互ひに提携して協力せんとするものである。この努力に對し、歐米のプロレタリアは同胞の好誼を以て助力を與へるであらう」と演説し、またジノウイエフは第三インターナショナルを代表して、「英國はペルシアを奴隸としメソポタミアとアラビアとをその植民地とし、その民をして飢餓に陥らしめてゐる。埃及におけるその暴虐はファラオの時よりも甚だしく、支那においては、鴉片を以てその人民を毒しつゝある。吾等は先づ英國に對して、戦を宣せんとするものである。而して最後の勝利を得るまでは幾年の久しきにわたるも止むものでない」と叫び、萬

雷の如き喝采を博した。トルコ、ペルシア、アフガニスタン、印度等の代表も亦、皆異口同音、英國に對する極度の反感を示し、英國に對抗するために、ソウエート政府と提携せんことを高唱し、エンウエル・バシヤすら、是等諸國が、ソウエート・ロシアと同盟せんことを極力慫慂した。なほ同大會はレーニン。トロツキー。ジノウイエフ。スターリン。ラヂツク等を名譽會長に推し、東洋における宣傳常設委員二十五名を任命した。

ソウエート政府の東洋「赤化」政策は、實にこのバクターにおける最初の東洋民族大會をスタートとして、發足してゐる。大會參加の各民族は、やがてソウエート・ロシアと提携し、歐米列強、殊に英國の帝國主義に對して、反抗運動を開始した。

## 六

一九二〇年の春、私のモスクワ滞在中、最も重大な出來事はソウエート政府がポーランドに對して、宣戰を布告したことである。たゞ當時は世界大戰の直後、歐洲では

戰亂頻發の際とて、世人はあまり露波戰爭に注意を拂ははなかつたが、これは實にレーニンの革命一代史上における重大事件であつて、ボリシエウイキーの世界政策を論ずるにあたつて、この戰爭を見逃がしてはならぬ。

當時ポーランドに對する宣戰布告を機會に、モスクワ國立大劇場で開かれたソウエート臨時大會は、私も傍聴したが、レーニンは「事、己に干戈をとるに至つた以上は何等の躊躇をゆるさぬ。すべてを犠牲にして、最後の勝利をかたねばならぬ」と獅子吼し、トロツキーも亦「全世界をして、協商列強の外に、も一つソウエート・ロシアてふ力のあることを知らしめよ」と絶叫し、非常な緊張ぶりを見せた。しかし、當時のロシアは、實に革命後の混亂状態にあつたばかりでなく、辛ふじて國內の反革命亂を平定したばかりで、到底力を外にのばす餘裕はなかつた。當時世人の多くは、ポーランドの攻撃を以て、血氣にはやるトロツキーの「遣り過ぎ」である。彼とその部下の功名心から出た野謀であるとなした。

然るに、トロツキは、その最近の著書において、這裡の革命秘史を暴露し、當時のポーランド攻撃の張本人は、性急にして、功名心の燃ゆるが如きトロツキでなく、却つて遠謀深慮のレーニンであつたといふ事實を明らかにした。即ち一九二〇年の赤色軍のポーランド入りは、單にワルソー攻畧を目的としたものでなく、實にレーニンが一生一代の冒險で、世界革命の大芝居を打たうとしたものである。蓋し當時レーニンの意中、ポーランドにして赤化すれば、隣りのドイツも赤化する。ドイツにして我が手に入れば、歐洲はおのづから我がものとなる。世界革命の成功はこれで保證される。要するに歐洲列強が戦争直後の混亂状態から脱却しえないうちに、一氣呵成世界を「赤い手」で一なでになで、しまはうとのレーニン一代の放膽極まる大陰謀であつたと云ふのである。

たゞしかし、當時のレーニン等は、何故、しかく世界革命を急いだか。何故、歐洲大戦争と革命内亂とで、疲弊し切つた當時の國情を顧みずに、かゝる無謀極まる戦争

を敢て企てたか。勿論それには、相當の理由がなくてはならぬ。

× × × × × × ×

ボリシエヴィキの十月革命に成功し、ソウエート政權を打ち建つるや、彼等はかたく、ロシア革命の成功を確保するには、この革命を延長して、世界に波及せねばならぬ。しからざれば、資本主義の列強は必らず、生れたばかりのロシア革命をおし潰してしまふであらうと信じた。即ち「資本主義國と社會主義國とは兩立し得ない。前者が後者を白化するか、後者が前者を赤化するか、二者その一つに歸する」。換言すれば「赤白兩立は不可能である」とのマルクシズムの原則をその文字通り鵜呑みに信じ彼等はたゞもう、伸るか反るかの大冒險で、遮二無二「世界革命」の目標に向つて、まつしぐらに猛進したのである。

革命の當初、四圍の形勢はたしかに、このマルクシズムの原則を如實に證據だてつゝある如くに見へた。即ち革命後のロシアは、間もなく、四方から列國の武力干渉を

うけ、所謂「二十四ヶ國の白色聯合軍」に包圍され、漸やく彼等の握り得た「勞農の天下」は、十月革命成功の直後、忽ち危急状態に陥り、折角赤化したロシアは、今にも白化し去られんとするの有様であつた。こゝにおいてレーニン等は、革命の劈頭から單に「革命のロシア」を防禦するだけでは足らぬ。防禦から直ちに攻勢に移らねばならぬ。「世界革命」までおし切らねばならぬ……となし、辛ふじてロシアを赤化したばかりのポリシエウイキーは、一足とびに直ちに「世界赤化」の大野謀を企て、世界の各方面に、宣傳費をバラ撒き、戦争と革命の後、疲弊し切つた上に鈍重象の如きロシアを鞭撻して、いさもつかせず、直ちに世界革命戦へ移らせたのである。しかし、當時のロシアは、少くとも、内亂の一段落を告げた機會に、退いて國力休養に専心すべきであつた。戦争にあき、且つ疲れきつたロシア國民に向つて、更らに新らしい戦争：しかも「世界革命」と云ふ如き多數兵卒のためには、漠然としておてどのない標榜の戦争……を強いたのは、あまりに無謀な企てであつた。

果して、ポーランド攻撃は、最初の三四ヶ月間こそ、赤色軍の旗色頗る優勢に見へたが、ワルソーの近くに迫つて、佛將ウエーガン將軍の率ゆるポーランド軍のために大逆襲を加へらるゝや、ブーデンヌイの騎兵隊先づ敗退し、つゞいて赤色軍の總退却となつた。折角、トロツキイ等の心血を注いで、つくりあげた赤色軍も、見苦しい惨敗をとり「世界革命」どころか、ロシア革命それ自身が、非常の危急状態に陥つた。

## 二 ボリシエウイキーの二大標榜

レーニンの二大失策・革命の「戰畧的退却」・資本主義の安

定・赤露白化説・世界列國の五大反目・赤白兩立不可能論

帝國主義の「正面」と「背面」・西守東進策

### 一

レーニンは、十月革命において、私の觀るところ、二つの大なる失敗を演じた。

その一つは、農業國たるロシアにおいて、共產制度を即行しやうとして失敗したことで、もう一つは、一氣呵成に世界革命の強襲を試みて頓挫したことである。

レーニンは、云ふまでもなく、マルクシストの中で、最もよくマルクシズムの理論を正解し、又最も大膽にこれが實行を試みた人である。マルクスは理想を畫き、レーニンはこれを現實に試験したのである。然し、レーニンの事績を仔細に研究するに、彼は時として、あまりにマルクシズムの原則に執着拘泥して、理想に走り過ぎたことがあつたと同時に、又時として、マルクシズムの原則を根本からへし狂げて、全く見當外れの横道にはいることもあつた。即ち農業國のロシアで、共產制度の即現を試みたときはたしかに「共產制度は産業の熟達した國でなければ實現出來ぬ」てふマルクシズムの原則を没却し、全然これに反抗して猛進したものである。之れに反して、

世界革命の強襲即行は、「一國だけのソシアリズムは永續し得ない、世界舉つて赤化する時において、初めてその成功が保證される」とのいま一つのマルクシズムの原則を鵜呑みに信じて、一氣呵成に、ロシア革命を全世界に延長しやうと焦つたものである。然るに前者に於ても、後者に於ても、事は多く志と違ひ、農業國の共產主義化計畫は、遂ひに半途にして頓挫し、世界革命の強襲も亦大失敗に終つた。

この二大失敗の後、レーニンは對内對外ともに「大退却」を決行した。即ち一方、國內においては新經濟政策の名のもとに、大に農民に讓歩し、一部資本主義の制度を復活したと同時に、他方、列國に對して戦争を中止し、宣傳の手をゆるめて、俄かに講和交渉を急ぎ出した。

但し、レーニンは、この内外に對する「大退却」を「戰畧的退却」と名づけ、たとひ、それがクラシシンの云へる如く「必要の壓迫の下に餘儀なくされた退却」であつたにしても、決して「敗北の結果」ではない。ポリシエウイキーはまだ兜を脱いで

居らぬ。われ等は、再び攻勢に轉すべき實力を維持して、退却したのである。一時の退却は他日陣容を立て直し、捲土重來せんがための用意である……と云ひ、退却後、やゝもすれば士氣沮喪せんとする黨員を激勵し、ソウエート政権の支持と、共產黨の結束につとめた。

しかるに、この「戰畧的退却」は、その後、數年間、引きつゞいて繼續され、内は諸般の經濟組織がドシ／＼資本主義の制度に引戻され、外は各國との國交が恢復し、「赤色ロシア」はたゞ益々その色が褪せ行くのみである。最近二三年、殊にレーニン没後に至り、ロシアの内外に「ロシア白化説」を傳へるものがいよ／＼多くなつたのも過然でない。即ち「ロシアの白化」論者は、

ワルソー城下の敗北に懲りたポリシエウイキーは「世界革命」のモットーを拋棄した。列國に對するその後の平和政策は、世界一赤化一の野謀を斷念した證左である。その國內における共產制度を撤廢せるは、資本主義の前に兜を脱いたものである。

との断定を下したのである。近年にいたり、この「赤露白化」説は、たゞに局外者の間のみならず、ポリシエウイキ一の黨員中にすらこの説に傾き、「世界革命」の大標榜に對して、懷疑と失望を抱くものが、漸やく多くなつて來た。内は新經濟政策の擴張と、外は列國との國交恢復とともに、ポリシエウイキ一自ら桃色化せんとする勢が日を逐ふて顯著となつた。

## 二

この一兩年前來、是等ポリシエウイキ一中の「軟派」のために、も一つ、彼等の桃色傾向を促した現象がある。所謂「資本主義の安定」がそれである。

歐洲の列強は、最近に至り、漸やく歐洲大戦争の創痕が快癒し、英佛白等の戰勝國は云ふまでもなく、戰敗國のドイツすら、その暴落のドン底に達したマーク相場を殆んど戰前状態に引きもどさんとする勢ひとなり、歐洲は所謂「キャピタリズムの安定状態」にはいつた。こゝにおいて軟派のポリシエウイキ一は、

さきに、世界大戦直後の混亂時代においてすら、世界革命の強襲は、あのやうな見苦しい惨敗に終つた。安定後の資本主義列強に對しては、われ等に到底勝算がないや、もすれば、ソウエート革命は、資本主義列強のために壓倒されんとする恐れがある……

とて益々悲觀論に傾き、軟派中の極端なるものは、この「資本主義列強の安定」をもつて、頗る根柢の深い現象となし、特に二大資本主義國たる英米の接近提携は、この安定をして、一層鞏固ならしめ、その結果

世界革命は、到底不可能である。共產黨は退いて防禦作戰に移り、徐ろに世界各國の穩和社會黨と提携して、自家の安全をはからねばならぬ……と云ふやうな消極政策を唱へ出した。

## 三

一昨年から、昨年にかけてのポリシエウイキ一は、この「資本主義の安定」問題を



中心として、硬軟兩派の討論をすゝめた。これと同時に「赤白兩立不可能」の原則問題も、猛烈な議論を沸騰させた。然し、結局、黨員の大多数は硬派であつて

資本主義國が安定したと云ふならば、ソウエート聯邦も亦安定した。むしろ後者の安定の方が前者のそれよりも遙かにより鞏固である。従つてボリシエウイキーは、この際、資本主義に對して、屈服する何等の理由を認めない……との見地から、軟派の消極政策を駁し、殊に硬派の巨頭スターリンは、昨年末のロシア共産黨大會において

現下の世界には、五つの互ひに相背馳する勢力がある。即ち

- 一、資本主義の世界におけるブルジョアと、プロレタリアの反目。
- 二、資本主義列強の帝國主義と、彼等の植民地における獨立運動との對抗。
- 三、世界戦争後における戦勝國と、敗戦國との唯み合ひ。
- 四、戦勝國間の同志打ち。

五、ソウエート國と、資本主義國との對抗。

この五つの互ひに相背馳する勢力は、日毎に烈しく相搏たんとしてゐる。しかも、その中の一から四までの四つは、資本主義國間の同志打ち、若しくは各自國內の内訌である。彼等はこの同志打ちと内訌とに加うるに、更らにソウエート國と戦はねばならぬ状態にある。これに反して、ソウエート國は、其内部において何等の訌争なく、全力を擧げ、敵、即ち資本主義國に當り得る。これ即ち、ボリシエウイキーが世界革命の成功を確信して進む所以である……とし、硬派ボリシエウイキーのために一大氣焰をあげ、忌憚なく資本主義國間の弱點を指摘した。

#### 四

これと同時に、「赤白兩立不可能」の原則論についても、昨年の露國共産黨大會は、同黨幹部から提出した世界政策綱領において、左の如き斷案を下し、明確にこの原則

を肯定した。

「社會主義國と資本主義國とは到底長く兩立し得ない。結局そのいずれかの勝利に歸してしまふ」といふは、レーニズムの鐵則であつて、斷じて動かすことを許さない。たゞ問題は、「長く」「結局」の期限の解釋である。「長く」といふは幾何の時間を意味するか。「結局」とは如何なる時期を指すか。革命の當初われ等は、一年か二年、もしくは數ヶ月間に兩者の勝敗は決してしまふものと考へた。然るにその後の時勢の推移は、此の期限の案外永續すべきことを證據立てた。即ち我等は期限の計算をあやまつた。しかし、「彼我兩立不可能」の根本原則に至つては、われ等はこれを改むべき何等の理由を見出さない。

これによつて見ても、レーニン等が革命の當初、相互の勝敗が如何に速かに決するものと考へたかゞはつきりわかる。レーニンが一九二〇年、歐米列強が戦後の陣容立て直しをやらないうちに、正面突撃で、一氣呵成に世界革命を強行しやうとしたのは

即ちこちらが攻撃に出で、少くとも西歐中部の二三國を赤化しなければ、必らずあべこべに列強のために、露國革命が押しつぶされてしまふと考へたからであつたのである。しかるにポーランド突破の第一戦で敗北し「世界革命の強襲」は慘敗に終つた。しかし、それと同時に資本主義國の方でも、シベリア出兵は何等の効果を奏せず、コルチャク。デニキン。ユデニツチ等のロシア白黨の前後して潰亂敗走するに及び、「露の白化」も、またつひに見苦しい失敗に終つた。

即ち、ロシアの世界赤化計劃の失敗と同時に、列強のロシア白化計劃、亦失敗に終つた。これがために、理論上において兩立すべからざる「赤白の兩世界」が、事實において、長期間兩立し得ることが證據だてられた。

しかし、この「長期間」といふは、たゞ「最初豫想したよりも長い」と云ふだけで、「無限に永久に兩立し得る」と云ふのではない。ソウエト・ロシアと資本主義國とは今もなほ依然として敵國である。その列國と講和を結び、通商を開けるは、たゞ一

時の「休戦」に過ぎない。いつか又兩者は、再び戦端を開くであらう。而してその結果、いづれか一方が他の一方を征服してしまはぬ限り、兩者の争闘は止まぬであらう已に「赤白兩立不可能」の原則にして、動かすべからずとすれば、ボリシエウイキトは、嫌やが應でも、「世界革命」の一途に向つて進む外ない……。前記「世界政策の綱領」の要領は即ちこゝにあるのであつて、硬派のボリシエウイキト、少くともスターリンを首領とする露國共產黨の現幹部は、たしかに、この方針を堅持して進みつゝ、あるものと見なければならぬ。然らば、已に強襲作戦において失敗したボリシエウイキトは、如何なる作戦によつて、この「世界革命」を進めんとするか。

## 五

固よりボリシエウイキトは共產主義者である。ボリシエウイズムの最終の目的は、「共產主義の社會」を建設するにあるはいふまでもない。又「共產主義の社會」が、産業の極度に發達した國に於て、初めてこれが實現を期し得るといふのが、マルクシズ

ムの原則であり、且つレーニンの私に語つた如く「眞のコンミュニズムの成功の機會を有するは、今日のところ、西洋だけである」とするならば、共產革命の本舞台は、當然、産業の發達した歐米でなくてはならぬ。而して、歐米における共產革命が、無産階級の資産階級に對する反抗、即ち労働運動を以て、その最も有力なる作戦方法であると云ふも亦、マルクシズムの説いてゐるところである。

× × × × × ×

しかし、資本主義には、必らず帝國主義がつきものである。この二つの主義は、常に相倚り、相扶けて、その權力を支持し、その勢力の増進を計つてゐる。而して資本主義の發達に伴ふて、労働階級を増大すると同様に、帝國主義の振興につれて、弱少民族が征服され、屬領國や殖民地がふえてくる。否な、レーニニズムによれば、この二つの主義は、畢竟同じものである。彼等は帝國主義は「資本主義の最も爛熟せる一階梯である」との定義を下してゐる。而して東洋の被壓制民族は、實に資本主義の最



手 握 の と 人 黒 と 人 露

も爛熟した歐米列強の帝國主義の犠牲である。然らば、即ち東洋の被壓制民族が、歐米の帝國主義に反抗しておこす獨立運動は、たとひ、今直ちに、直接共產革命に導くものでないとしても、終局の結果において、歐洲の帝國主義の覇權を揺るがし、間接に世界の資本主義を破滅に導く力とならねばやまない。

こゝに於て、ポリシエウイキーは、一方労働階級によつて資本主義にあたると同時に、他方、弱少民族によつて帝國主義に反抗するの作戰方針を樹てた。而して、前者即ち階級闘争による革命運動は、主として無産階級の多數にして、且つ組織だつてゐる歐米に於てこれを行ひ、後者、即ち民族闘争による革命運動は、主として被壓制民族の最も多數なる東洋に於てこれを行ふ。換言すれば、一つは、ポリシエウイキーの對歐米政策、他の一つは東洋政策の根本をなすもの、更らにこれを言ひ換へれば、ポリシエウイキーの世界革命政策は、歐米に於ては労働運動を主とし、東洋に於ては、民族解放運動を眼目とし、この二つの作戰によつて、資本主義及びその最も「爛熟せ

る「階梯」たる帝國主義を打破せんとするものであると云ひ得るのである。

## 六

世人の中には往々、ボリシエウイズムを以て、單に、プロレタリア階級によつて、資産階級に對抗するものとのみ考へてゐるものがある。しかし、これは全くボリシエウイズムの半面を見て、他の半面を見ない偏見であつて、ボリシエウイキーには、前項所記の如く、「東洋の被壓制民族によつて歐米の壓制民族に對抗する」と云ふも一つ大きなモットーのあることを見のがしてはならぬ。

たゞこの二つのモットーの中、いづれを先きにし、いづれを後にすべきか、或はこの二つを同時に併行して行ふべきかは、ボリシエウイキー黨内において幾度か議論を沸騰させた世界革命作戦上の重大問題である。

もとより、共產革命の根本義から云へば、この革命の本舞台たるべき歐米に向ひ、その無産階級を指導して、資産階級に對抗する第一策が、この革命への「捷徑」であ

つて、第二策の東洋における被壓制民族の帝國主義に對抗する解放運動は、その「迂廻路」とせねばならぬ。ロシア共産黨幹事長スターリンの言を籍りて云へば、西洋は帝國主義の「正面」であつて、東洋はその「背面」である。

× × × × × ×

昨年私はモスクワでスターリンを訪ひ、幾多の質問を發した中に、本著の冒頭にある一九二〇年のレーニンとの問答談を引いて、

「近年支那、印度、ペルシア、埃及其他東洋諸國において頻發する解放革命の運動は、西洋列強が已にレーニンの云へる如く、自ら東洋で掘つた穴の中に已を埋める時期が近づいた前兆ではならうか」  
との質問をなしたところ、スターリンは

「然り、たしかに余もさう思ふ。殖民地は帝國主義の背面である。背面の根據地の革命化はたゞに帝國主義をして、その後方の守りを失はしめるのみでなく、西洋革

命の危機に對して、決定的ショックを與へるもので、われ等はこれによつて、帝國主義を覆さねば止まないものである。背面と正面の兩方から、攻めたてられた帝國主義は結局滅亡の外無からう。」と答へた。

× × × × × × ×

一九二〇年のポーランド攻撃は、云ふまでもなく、レーニンが、前記の第一策によつて、敵の「正面」に向ひ、「最捷徑」をとつて、猛襲を強行したものである。彼はたゞにポーランドの共産黨をして、同國內の労働運動を煽動させたのみならず、同時に赤色軍の武力を以て、「ワルソーから、ベルリンへの正面突破」を試み、「資本主義の歐羅巴」を一氣に打ち破らんとしたのである。しかし、一九二〇年の「革命の強襲」は前記の如く、ワルソー城下の激戦における赤色軍の惨敗とともに、見苦しい失敗に終り、爾來、レーニン等は「戰畧的退却」を決行し、「持久作戰」に移るべく餘儀なくさ

れた。而して持久作戰に移つた以後のポリシエウキーは、次項に記述する如く、正面突撃を避けて、背面迂回の方針をとるの已むなきに至つた。

### 七

レーニンは西洋における「プロレタリアの労働運動」と、東洋における「弱少民族の解放運動」の「二大革命戦畧」の遂行にあたり、第三インターナショナルをおこして、労働運動を指揮せしめ、同時に「民族政策」の名の下に、東洋民族の解放運動を企てた。而して第三インターナショナルの議長には、その最も信頼せる高弟ジノウイエフをあげて、これに任じ、民族政策は、専らスターリンをして、その局に當らしめ以て、「世界革命」の大成を期した。

然るに第三インターナショナルの事業は、一面、世界各國の共産黨を統一し、その行動の指導權を掌握しえた點だけは、かなりの成功と見るべきであるが、他の一面において、世界各國において企てた計劃は、その大半、失敗に終つてゐる。即ち一、ホ

ンガリーの共産革命は三日天下に終り、二、ポーランド攻撃には惨敗をとつた。三、ジノウイエフ等の最も力を入れた獨逸は、さきにリープクネヒトや、ローザ・ルクセンブルグ等の同志を失ひ、今はヒンデンブルグの反動時代を見るに至つた。四、英國では一時労働内閣の出現を見たが、間もなく再び保守黨の天下となり、五、フランスも亦ポアンカレーや、ブリアン等ポリシエウイキーとは水火相容れない白色政治家の手にある。こゝにおいて近年の第三インターナショナルは「強國赤化」を一時斷念して、バルカンや、バルチック沿海の「小國赤化」方針をとつたが、この方面においても、到るところ、反動勢力の逆襲中々猛烈で、ボルガリア及びエストニアでは、昨年ソフキヤ及びレワールの出來事において、幾多共産黨の戦闘分子を失ひ、これらの諸小國は、今や却て、列強の對露攻撃の根據地たらんとしつゝある。かくして、第三インターナショナルの歐洲における活動は頗る振はず、最初レーニンの期待せる「世界革命の參謀本部」としての使命を果し得るや否や、甚だ疑はしくなつて來た。

これに反し、東洋方面におけるスターリンの政策は、到るところ、その圖に當り、一、ソウエート聯邦内の東洋民族は悉く、ソウエート政治の下に歸依し、文化と經濟の發展に向つて進みつゝあると同時に、二、近東及び中東においては、トルコ、ペルシア、アフガニスタン等の被壓制國が、次きから次ぎとその獨立を確立し、東洋民族の解放運動と、向上の氣運は、まさにアジアの大陸を蔽はんとし、その結果は、やがて歐洲列強を牽制し、所謂「西における正面攻撃」に策應すべき「東よりの背面攻撃」の實をあげつゝある。概して云へばポリシエウイキーの「世界革命」計畫は、ジノウイエフの擔當せる西歐の「正面攻撃」で蹉跌し、スターリンの受持つ東亞の「背面攻撃」において着々成功しつゝある。換言すれば、ポリシエウイキーは、西において守り、東において攻勢をとることゝなつたわけである。

## 八

これを要するに

一、ボリシエウイキ―は、「赤白兩立不可能」の原則にスタートして、「世界革命」を最終の目的となすの點において、十月革命の當初と、今日と、何等かはるところがない

二、たゞ、ソウエート・ロシアも、資本主義の列國も、ともに大戦争の直後、國力疲弊の極に達し、互ひに強襲によつて、勝敗を一戦に決する力がなかつた結果、赤白兩立の状態が、案外長く續くことゝなつた。

三、然し、この「赤白の兩立」は決して無限に永續するものでない。兩者は依然主義上相容れざる敵であつて、その互に講和條約を結び、通商貿易を開始せるは、單に一時の「休戦」に過ぎない。

四、最近、兩者、ともに、大戦争の創痍快癒し、戦後の混亂時代から、漸やく、「安定」状態にはいつた。兩者はその力の恢復とともに、やがて「休戦」状態から、再び赤白對抗戦に移るであらう。而して

五、赤白闘争のいづれは、社會主義國が、資本主義國を赤化するか、或は後者

が前者を白化するか、結局二者その一つに歸せねばやまぬ。従つてボリシエウイキ―はマルクシズムの大理想たる共產社會建設のためのみでなく、ソウエート・ロシアの存在を永久に確保するためにも、あくまで「世界革命」の標榜に向つて進まねばならぬ

六、然らば彼等は「世界革命」を如何にして行はんとするか。レーニン<sup>88</sup>はボリシエウキ―のために二つの作戦方針を遺した。一つは世界の（主として歐米の）勞働階級を團結して、資本主義にあたること、他の一つは、世界の（主として東洋の）被壓制民族を聯合して、帝國主義にあたること、それである。

七、コンミニユニズムの根本義から見れば、この二つの世界革命策中、當然、前者を以て、資本主義に對する「正面攻撃」とし、共產革命への「捷徑」とし、先づこの策をとるべきであるが、此の方面（主として西歐列強）の資本主義の抵抗力頗る頑強で、今日までの正面攻撃は、悉く撃退され、又近き將來において、これが再舉を企て、も到底勝算おぼつかない。



八、このにおいて、ポリシエウイキは、この最近の二三年、主として、第二策、即ち東洋方面に「迂迴」し、被壓制民族によつて、資本主義に對する所謂「背面攻撃」に力を集中しつゝある。蓋し、敵の抵抗力の強くして、攻撃至難なる歐洲正面をあと廻しとし、抵抗力の薄くして、且つ常に味方に引き入れやすい被壓制民族の多數なる東洋にその攻撃の方向を轉換したことは、戦畧上當然の勢と見なければならぬ。

かくして、ポリシエウイキは、「赤白兩立不可能」の原則による「世界革命」の全局から見て、今や、正面攻撃から、背面攻撃にうつり、「西守東進」策をとつて、その力を東洋に集注しつゝあるものと見るべく、従つてポリシエウイキの東洋政策は、この際、ソウエート政策中、最も注目し、また最も興味深い點であるとせねばならぬ。

然らばソウエート東方策とは如何。以下記述するところは、この興味深く、又注目すべき問題に對し、参考の資料を提供せんとするものである。

### 三 ソウエート民族政策

第二及び第三インターナショナルと被壓制民族・世界革命

の「豫備隊」・スターリンの二大民族政策

ソウエート・ロシアの東方策は、近頃の流行語を以て云へば、東洋「赤化」政策であるが、ポリシエウイキーはこれを「民族政策」と名づけてゐる。蓋し、ソウエート政府は、その東洋政策の眼目を、主として、東洋の被壓制民族におき、先づ是等民族の解放獨立を援助し、以て東洋における歐米列強の勢力を驅逐せんとしてゐるからである。

× × × × × ×

歐洲現時の社會主義者は、概して第二インターナショナル系の穩健派と、第三インターナショナル系の過激派の二派分野の状態にあるが、彼等の被壓制民族、主として東洋の植民地及び屬領國民に對する政策も亦、兩派の二つに分れ、各々その主張を異にしてゐる。

第二インターナショナルの民族政策、殊にその植民地政策は、甚だ不徹底なもので

概して口には植民地及び弱少民族の壓制を非とし、之れを罵倒してゐるが、實際に於ては、各自その本國政府の政策を支持してゐる。また、同じ壓制にしても、その民族自國の官憲のやつたことに對しては、遠慮なく攻撃を加へるが、これが歐洲列國の政府によつて行はれた場合には、之れを默過するといふやうな傾向がある。たとへば、先年トルコでアルメニア人の虐殺が行はれた時の如き、彼等はこれを「サルタンの暴虐」と稱して、熱烈な反對示威運動を行つた。しかるに、其の後一年にして、フランス政府が、モロッコに兵を送り、回教民の大壓迫を行ふや、第二インターナショナルの社會主義者は擧つて沈黙を守つてゐた。殊に顯著な例は、英國の勞働黨が政權を握つた時、同黨の領袖にして、第二インターナショナルの幹部の一人たるマクドナルドが英國總理としての印度の統治策に於て、壓制の手を緩めるところか、却つて大ひに警戒を嚴にしたことである。

## 二

これに反し、第三インターナショナルの民族政策は、飽く迄で徹底してゐる。どこまでも、民族自決主義の實行を標榜し、あらゆる民族の解放獨立運動を援助して、歐洲列強の帝國主義に反抗し、壓制國の勢力驅逐に向つて猛進せんとするものである。中にもレーニンは、第三インターナショナル系のマルクシストの中で、最も熱心なる民族政策の徹底論者であつた。而して彼の弟子たるボリシエウイキョーが、この政策の最も忠實なる實行者たるは當然のことで、十月革命後、レーニンから、此の方面の政策を託されたスターリンは、曾て、私に左の如く語つたことがある。

民族政策はレーニニズムの根本の一つである。われ等はみなレーニンの弟子であつて、レーニンはこの政策をわれ等に教へてくれたのである……

抑も「弱少民族をして革命の味方たらしめよ」とはマルクスも説いてゐる。しかし彼は主として歐洲における被壓制民族を指した如くであつたが、レーニンに至つては

眼を廣く世界の全局に擴げ、主として力を東洋における被壓制民族に傾倒した。恐らくレーニンほど世界革命の全局から見て、東洋民族の將來に重きをおいたものはなからう。

レーニンは又世界革命の「前衛」たるべき歐米先進のプロレタリアに對照して、東洋の被壓制民族を稱して「世界革命の豫備隊」と名づけた。

## 三

ソウエート政府は、東洋の被壓制民族を

一、ソウエート聯邦内の東洋民族

二、東洋の植民地、及び半獨立國

の二つに大別し、これに對する政策も亦、各別個の方針をとつてゐる。

× × × × × ×

昨年、五月十八日、恰度、私がモスクワに滞在中のことであつた。東洋労働共産大

學において、全大學の名譽總長たるスターリンは大學創立の四週年を機會に「東洋労働共產大學の政治的使命」と題して、長廣舌をふるつた。この大演説は、實にソウエート政府の東洋民族政策に對して、最も適確なる説明を與へたものである。即ち、スターリン曰く、

本大學は、五十種族以上の東洋民族出身者を容れてゐる。その半は、ソウエート聯邦内の東洋民族出身者であつて、他の半は、東洋に於ける殖民地及び屬領國から來たものである。前者に於ては、既に、労働階級が帝國主義の壓迫を脱し、自ら政權を握つて居る。しかし、後者にあつては、今尙ほ、資本主義が跋扈し、帝國主義が暴威を振つてゐる。この二つの全然相異つた状態にある各民族の出身者を學生として容れし居る本大學は勢ひ片足をソウエート領内におき、片足を殖民地及び屬領國に踏み出し、二つの相異つた使命に向つて進まねばならぬのである。即ち、その一つは、ソウエート聯邦内の東洋民族のために、共產黨の幹部を養成するにあつて、他



スターリン……(寫眞の背景はス氏が自署して)……  
 (著者の質問に答へた覺書)

の一つは、東洋の植民地及び屬領國のために、革命運動の指揮者を養成するにある。先づ、ソウエート聯邦内の東洋民族に就いて論せんに、彼等は他の東洋の植民國、若しくは、屬領國の東洋民族に比し、左の點において異つた状態にある。

ソウエート聯邦内における東洋民族の諸共和國は、

第一、も早や、帝國主義の覇權をうけてゐない。

第二、資本主義の制度を脱却し、ソウエート政權の治下にある。

第三、産業の開發が甚だしく遅れてゐるが、常にソウエート聯邦の産業によつて援けられ、これに倚賴し得る立場にある。

第四、強國の植民政策によつて壓迫せらるゝことなく、労働階級の專制の保護下にあつて、ソウエート聯邦の一つを形成して居る。従つて常に、聯邦の社會主義的建設に合同し得る立場にあり、また現に合同すべくつとめつゝある。

右の如き事情にあるから、ソウエート聯邦内の東洋民族の指導者は、先づ左の使命

を果さねばならぬ。

一、益々工業の發展をはかり、以て労働階級を中心として、その周圍に農民を結合せしむる地盤を築くこと。(我等は、ソウエート聯邦全體の經濟的發展につれ、東洋民族の諸共和國に於て、已に、その工業の發展援助策に着手した。これらの共和國は、みな豊富な天然富源をもつてゐるから、その工業の發展は將來頗る有望である)。

二、農業を改善し、特に、人口灌漑に力を入れること。(この事業も、既に着手され高加索及びトルキスタンでは、可成りの成績を擧げてゐる)。

三、多數農民の間に、消費及び生産組合組織の發達をはかること。(これは、東洋民族の經濟機關をソウエート經濟組織の中に引入れる最良の方法である)。

四、各地のソウエートと地方労働民衆との接近をはかり、主として、土着民族の代表をして、ソウエートを組織せしめ、以て、民族的ソウエート國家の建設完成を

期すること。

五、民族文化の發達をはかり、普通教育も職業及び技術的教育も、成る可くその民族の國語を以つて教へ、土着民族の中からソウエート、共產黨、職業組合等の有力なる幹部を出さしめること。

翻つて、東洋における歐米列強の植民地及び屬領國の現状は如何と云ふに、彼等は先づ左の點において、ソウエート聯邦内の東洋民族と異つた状態にある。

第一、これ等の諸國は、今尙は歐米列強の帝國主義の羈絆下にある。

第二、内部（自國內の資産階級）及び外部（外國の帝國主義）の二重壓迫は、これ等諸國における民衆の革命氣分をして益々濃厚に溫醸せしめつゝある。

第三、これ等諸國の或る國、例へば、印度に於ては、資本主義が急激なる發達を遂げその結果土民間に多數のプロレタリア階級がおこりつゝある。

第四、革命運動の進展と共に、これ等諸國の資産階級は、革命派（小ブルジョア）

と妥協派（大ブルジョア）の二派に分れ、前者は革命闘争に加擔し、後者は外國の帝國主義者と提携し、これと妥協するを常とす。

第五、これ等の諸國では、一方、大ブルジョアが歐米列強の帝國主義との妥協提携をはかりつゝあるに當り、他の一方、これと併行して、労働者と革命傾向の小ブルジョアとが相提携し「帝國主義からの完全なる解放」を目的とする反帝國主義の合同を構成しつゝある。

第六、これ等の諸國では、無産階級の中に、先づ自國の資産階級と歐米列強の帝國主義との妥協を打破し、國民の大衆を兩者の壓迫から解放し、以て、自ら政權を握らんとする傾向が益々眞剣味を帯びて來つゝある。

第七、以上の現状は、一方これ等諸國の民族解放運動と、他方西洋先進國のプロレタリア運動との間における相互の結束を容易ならしめ、且つこれを促進しつゝある右の事情から推して我等は少くとも左の三つの結論に歸着し得る。

一、東洋における歐米列強の植民地及び屬領國は、國民革命の勝利によらずして、歐米列強の帝國主義の羈絆から解放され能はぬ。

二、東洋における歐米の植民地及び屬領國中の資本的に發達せる國、たとへば印度の如き國にありては、その獨立は、(一)妥協主義の國內大ブルジョアを孤立せしめ、(二)急進傾向の小ブルジョアをして彼等の勢力から離脱せしめ、(三)勞働階級の進歩的分子を結束して、獨立した政黨を組織することによつて、始めて之れが達成を期し得る。

三、東洋における歐米列強の植民地及び屬領國の歐米列強に對する國民革命の徹底的勝利は、その國の民族解放運動と、西洋先進國のプロレタリア運動との鞏固なる結束なくしては到底不可能である。

× × × × × ×

かくして、ポリシエウイキ一の東洋政策は、その最終の目的において、たゞ一つ「世界革命」を目標としてゐるが、それに向つて、進むに、二つの途をとつて居る。即ち第一、ソウェート聯邦領内の東洋諸民族に對して、廣汎なる自治權を與へ、その文化と經濟的地位の向上をはかり、そこにソウエチズムの徹底をはかる、と同時に、第二聯邦領外の東洋における歐米列強の植民地、屬領國及び半獨立國等に對して、その民族解放運動を援助し、そこに根をはつてゐる歐米列強の勢力を驅逐し、以て「世界革命の豫備隊」をつくり、「帝國主義の背面」をつかんとするのである。従つて、ソウェート東方策は、これを、一、ソウェート聯邦内の東洋諸民族對策と、二、聯邦領外の被壓制民族對策の二つにわけて論ずるを便とする。

#### 四 聯邦内東洋民族の自治政治

放膽なる民族自決主義・分裂離散から聯合團結へ・勞農同

盟條約・ソウエート聯邦の建設・トルキスタンの砂原に二

共和國の出現・民族平等主義の徹底・勞農兩院制度

#### 一

ソウエート聯邦内の少數民族、主として東洋民族に對するボリシエウイキーの政策は先づ「民族自決主義」から出發してゐる。「民族自決主義」は、歐洲大戦争の終り頃、米國大統領ウイルソンによつて提唱され、十月革命後、レーニンによつて、最も大膽に實行された。こゝにおいて世人の中には、恰かもレーニンが、ウイルソンによつて、この主義を教へられたかの如く考へたものもあつたやうであるが、しかし、「民族自決主義」は、最初からレーニニズムの最も重要な綱領の一つであつて、レーニンが已に歐洲大戦争前、夙に高唱したところである。

一九一三年のロシア社會民主労働黨（ボリシエウイキー黨の前身）の幹部會議において、レーニンは、「民族自決主義」の徹底を主張し、「各民族は自由にその本國から分離し、勝手に獨立國を建設し得るものとす」との決議案を提出した。然し、かゝる極端なるレーニンの「民族自決主義」に對しては、黨内にも幾多の反對論者があつた。



たとへばブハーリンの如きは

「プロレタリア階級の自決主義」には賛成なるも、「民族の自決主義」には反対だ：  
とて、烈しくレーニンに喰つてかゝつたものである。

是等の反黒論者は、かりに、レーニンの云ふ如き放膽極まる「民族自決主義」を多数の民族を包容してゐるロシアにおいて實行したならば、ロシアは必然幾多の小國に分裂し、歐亞に跨るその龐大な領土は、たちどころに瓦解してしまふであらうとなし容易にレーニンの主張に屈服を肯じなかつた。

しかるに、レーニンは、「プロレタリアは常に大なる國家の建設を欲求する。プロレタリアは中世紀時代のバチキュラリズムに反抗し、なるべく廣い領土において、經濟的結合をはかり、資産階級との闘争をなるべく廣い範圍に展開するを利とする」との見地から「民族自決によつて、ロシアは決して瓦解しない。むしろ却つてその結束を堅くする。少数民族に對して、寛宏の態度を以て臨むは、却つてロシアをして大なら

しむる所以である」となし、反對論者を説破して、つひに「民族自決主義の徹底」を以て、黨是の一つとなすの決議を通過せしめたのである。而して、レーニンひと度、十月革命によつて、ロシアの政權を握るや、その日ごろの主張通り、革命の劈頭、堂々「民族自決主義」の宣言を發し、ドシ／＼露國領内の各民族に向つて、自決權を與へ、ロシア本國から分離すると、獨立しやうと、各自の欲するまゝにせよ……とのレーニン一流の大ザツバナ民族政策の實行にとりかゝつた。而してその結果、果して、異種民族は續々分離し、幾多の共和國は雨後の筍の如く簇生し、一時、かくては大ロシアの版圖も到底崩潰離散を免がれることが出來ないと見られた。

然るに、一度分離し、そして獨立したこれ等の諸民族は、いつの間にか、レーニンの最初から期待した通り、「各小民族のバチキュラリズム」の不利なるをさとるとともに、再び續々モスクワの支配下に立戻り、ソウエート聯邦の中に加盟した。

x x x x x

私は昨年モスクワで、スターリンに會つた時、こんな問答を交はしたことがある。  
 (私の問) ソウエート政府は、聯邦内の東洋諸民族に、自決權を與へ、ロシアから分離してもよし、獨立してもよしとなした結果、幾多自治と獨立の共和國が出来た。然し彼等は皆な再び、聯邦の組織内に入つた。モスクワは周圍の總しを引きつける力を持つてゐる。……ソウエート政府のこの磁石のやうな怪力はそも／＼何であるか？

(スターリンの答) ツァリズムの、汎斯拉ヴ主義とその弱少民族に對する多年の壓制は、是等の諸民族をして、舊政治を呪はしめ、その遠心運動をします／＼強からしめた。彼等の心の底深くに、「民族自決へ」の憧憬が燃えたつた。この時に當つて我等は新生活を開拓し、人類みな平等となし、人種の差別を問はず、互に尊敬しあふことゝした。この新しい條件の下に、諸民族は擧つて「一緒の方が善い」「一緒に働き度い」といふ結論に到着する外無かつたのである。

私は嘗つてタツス社長ドレッキーともレーニンの民族政策について談じたことがある。ドレッキーは、前記一九一三年の會議にも列し、レーニンの民族政策に反對した一人である。同氏は「革命前、即ち、外國に亡命してゐた當時、私達は度々、レーニンの民族政策が餘りに放膽すぎるといつて反對したものである。然るに革命後、レーニンが當時の抱懷をそのまま、斷行した結果は、悉くその圖に當つた。今更らレーニンの卓見に感服せざるを得ない。民族政策は實にレーニンの事績の最も大なるものである。分裂から、新らしい團結へ、そして、多數民族の平等の結合によつて、ソウエート社會主義共和國聯邦を建設する……それは實にレーニンが、革命前から、夙にその胸に畫いて居た大理想であつたのである……」と語つた。

次の數項において、ソウエート聯邦内における民族政策の、今日までの經過と、成績について、その梗概を記述する。

一九一七年、「三月革命」の後、歐露の西北邊疆の諸州は、續々露領から分離し、各々獨立國を建設した。その中、フィンランド。エストニア。ラトウエア。リスマニア及びポーランドの五國は、全然、名實ともにロシアの支配を脱して、別個の主義と制度の下に、獨立國を建設し、却つて、英佛等の列強の後援によつて、ロシアに對し、反抗的態度をとつた。然し、モスクワ政府は、強いてこれが併合を企てず、むしろ、是等の諸國を以て、西歐列強の露國に對する壓迫を緩和するための「緩衝地帯」となるの方針をとり、自ら進んで、通計二十九縣を露國の領土から切りはなし、フィンランドとは、一九二〇年十月十四日。エストニアとは一九二〇年二月二日。ラトウエアとは一九二〇年八月十一日。リスマニアとは一九二〇年七月十二日。ポーランドとは一九二一年三月十八日。各別に講和條約を締結し、その分離と獨立を承認した。

その頃、小ロシア及びコーカサス地方も亦、獨逸及び英國を後援とする反革命軍に

よつて占領されたが、この地方に對する、ソウエート政府の政策は、前記西北邊境對策とは、全然その趣きを異にした。即ち後者に對しては、全然その分離獨立をゆるし、且つ新獨立國をして資本主義國の列に加はらしめたが、前者に對しては、獨立を宣言せしめても、その獨立政府はソウエート主義をとり、且つ、ポリシエウイキ一の掌中にあらしめる方針をとつた。ソウエート政府はこの方針により、一方、赤色軍を進めて、反革命軍を討つと同時に、他の一方では、これ等諸州の共產黨員をして、各地方の獨立を宣言せしめ、ソウエート共和政府建設の準備にとりかゝらしめた。而してこの作戰の結果、やがて、各地の反革命軍は、外は赤色軍の攻撃と、内は共產黨の宣傳との挾撃を受けることとなり、一九一九年から一九二〇年にかけて、南路及びコーカサス一帯の反革命亂は悉く平定された。これと同時に、かねて準備されてあつた各地方の獨立共和政府は、いよいよ正式に成立し、モスクワ政府と、國際交渉に入ることとなり、

白ロシアは、……………一九二〇年一月十六日。  
 ウクライナは、……………一九二〇年十二月二十八日。  
 アゼルバイジャンは、……………一九二〇年九月三十日。  
 アルメニアは、……………一九二〇年十二月二日。  
 ジョルジアは、……………一九二一年五月二十一日。  
 各別にモスクワ政府と所謂「勞農同盟條約」なるものを締結した。今この條約の一例として、ウクライナとの同盟條約文を譯すれば左の如くである。

勞農同盟條約

ロシア社會主義ソウエート聯合共和國政府及びウクライナ・ソウエート社會主義共和國とは、プロレタリア大革命によつて宣言されたる民族自決權の見地に立ち、各締盟國の獨立及び主權を承認し、且つ國防及び經濟的建設のため、兩國協力の必要

を認め、兩國全權は左の勞農同盟條約に署名調印す。

第一條　ロシア社會主義ソウエート聯合共和國及びウクライナ社會主義ソウエート共和國は相互の間に、軍事及び經濟同盟を締結す。

第二條　兩國が外國に對して將來負はんとする總しの共通責務は、本同盟條約の目的たる勞農協同の利益を根底とし、ウクライナ共和國の領土が前ロシア帝國に從屬せる事實によつてウクライナ共和國が何等責務を負ふべきものに非ざることを約締す

第三條　第一條に於いて約定されたる目的の遂行のために、兩國政府は、左の各省を合併す。

陸海軍省、最高國民經濟會議、對外貿易省、大藏省、勞働省、交通省、遞信省。

第四條　兩共和國の合同各省は、ロシア共和國のソウエート内閣にこれを編入し、ウクライナ共和國は、その中央執行委員會及びソウエート大會の任命し且つ監督する全權代表をしてソウエート内閣に列せしむ。

第五條 合同各省の内部の組織、制度等は、兩政府協議の上、之れを協定す。

第六條 合同各省の指導及び監督權は、全露ソウェート大會及び全露中央執行委員會を通じて之れを行ふ。

但し、同大會及び委員會には、大會の決議に基づき、ウクライナ共和國はその代表を派遣するものとす。

第七條 本條約は、兩共和國の最高立法機關によつて批准さるべきものとす。

原文は一九二〇年十二月二十八日モスクワ市に於て露語及びウクライナ語にて二通作成し、兩國全權之れを署名す。

ロシア全權

チチエーリン

ウリヤーノフ(レーニン)

ウクライナ全權

ラコフスキー

三

「労働同盟條約」は、その形式において、立派な「獨立國間における對等條約」である。しかしその内容を見るに、陸海軍、大藏、交通等の主要なる各省は、これを合同して、モスクワにおくことになつてゐる。且つ、これが締結の當局者は誰かと云へばモスクワ政府の全權は勞農首相レーニン、外相チチエーリン、もしくは次官カラハンで、對手國の全權はラコフスキー(ウクライナ全權)アダモウイチ(白ロシア全權)シヤフタフチンスキー(アゼルバイジャン全權)等であつた。而して彼等はみなひとしくレーニンを首領とするロシア共產黨に籍をおく同志である。所謂「鐵の如き黨規」によつて律せられ、黨の首領の命令には、絶對的に服従するボリシエウイキーである。従つて「勞農同盟條約」は、たとひ表面「獨立國の對等條約」の體裁をそなへて居たにしても、その内實においては全く、内輪同志の提携の一形式に過ぎなかつたのである。要するに當時の南露及びコーカサスの諸州が特に獨立國を形成して、かゝる條約

をモスクワ政府と締結したことは、畢竟、ボリシエウイキー一流の「政畧」であつたと見なければならぬ。

即ち、これ等の諸州においては革命後、俄かに勃發せる分離獨立の風潮は反革命亂平定後と雖も、かなり強く多數の民衆を動かして居た。而して、民心の機微をとらへるに敏なるボリシエウイキーは、無暗にこの風潮に反抗するを不利とし、むしろ、表面これに迎合する如く見せるべく、一旦是等諸州をして獨立政府を建設せしめ、モスクワ政府はこれと、前記の如き「對等の同盟條約」を締結したのであるが、獨立政府の實權者と、同盟條約の署名者とは、皆な、同じ同志のボリシエウイキーであるから時機さへ來れば直ちに合併も聯盟も隨意に出来る……と云ふ見當でやつた「政畧」であつたのである。果然これ等の「同盟國」は、間もなく、自ら、その獨立權に制限を加へ、一步一步とモスクワに接近し、つひに再び、その統治下に聯合することゝなつた

## 四

一九二二年十二月三十日、モスクワに開かれた第一回聯邦ソウエート大會において是等四つの獨立共和國は「ソウエート社會主義共和國聯邦」の名の下に聯邦をつくることゝなつた。即ち全大會は左の如き決議案を通過した。

一、左の四共和國を以て、聯邦を組織す。

ロシア社會主義ソウエート聯合共和國。

ウクライナ社會主義ソウエート共和國。

白ロシア社會主義ソウエート共和國。

後コーカサス社會主義ソウエート聯合共和國。

(因に一九二二年十二月十三日の後コーカサス・ソウエート聯合大會において、アゼルバイジャン、アルメニア及びジョルジア三共和國は合併して、後コーカサス社會主義ソウエート聯合共和國を組織した)

二、聯邦は「ソウエート社會主義共和國聯邦」と稱す。

三、ロシア社会主義ソヴェト聯合共和國を以て聯邦の盟主とす。

四、聯邦を組織する各共和國の政務中、外務、陸海軍、外國貿易、交通、遞信、勞農監督、最高經濟會議、勞働、食料及び財政の各省事務は聯邦政府において之れを統一す。

五、モスクワを聯邦の首府とす。

六、聯邦を組織する各共和國は隨時自由に聯邦より脱退することを得。

斯くて一度ロシアから分離し、新たに獨立を形成せる諸州は、再びモスクワ政府の下に統一された。レーニンの「分裂より更らにより、かたき合同へ」の政策は見事に成功した。最初レーニンの「民族自決主義」に對して猛烈なる反對を試みたブハーリンや、ブレオブラヂェンスキー等の如きは、こゝに至つて、あいた口が塞からず、兩氏が異種民族に分離獨立をゆるすは、可愛い兒に、火遊びの危險を戒しめんとして、一度その手に火をつけさせるが如きものである。一度、火の危險を痛感した愛兒はもはや再び火遊びをしない……と同様、分離獨立した各民族は、獨立後の經濟、文化

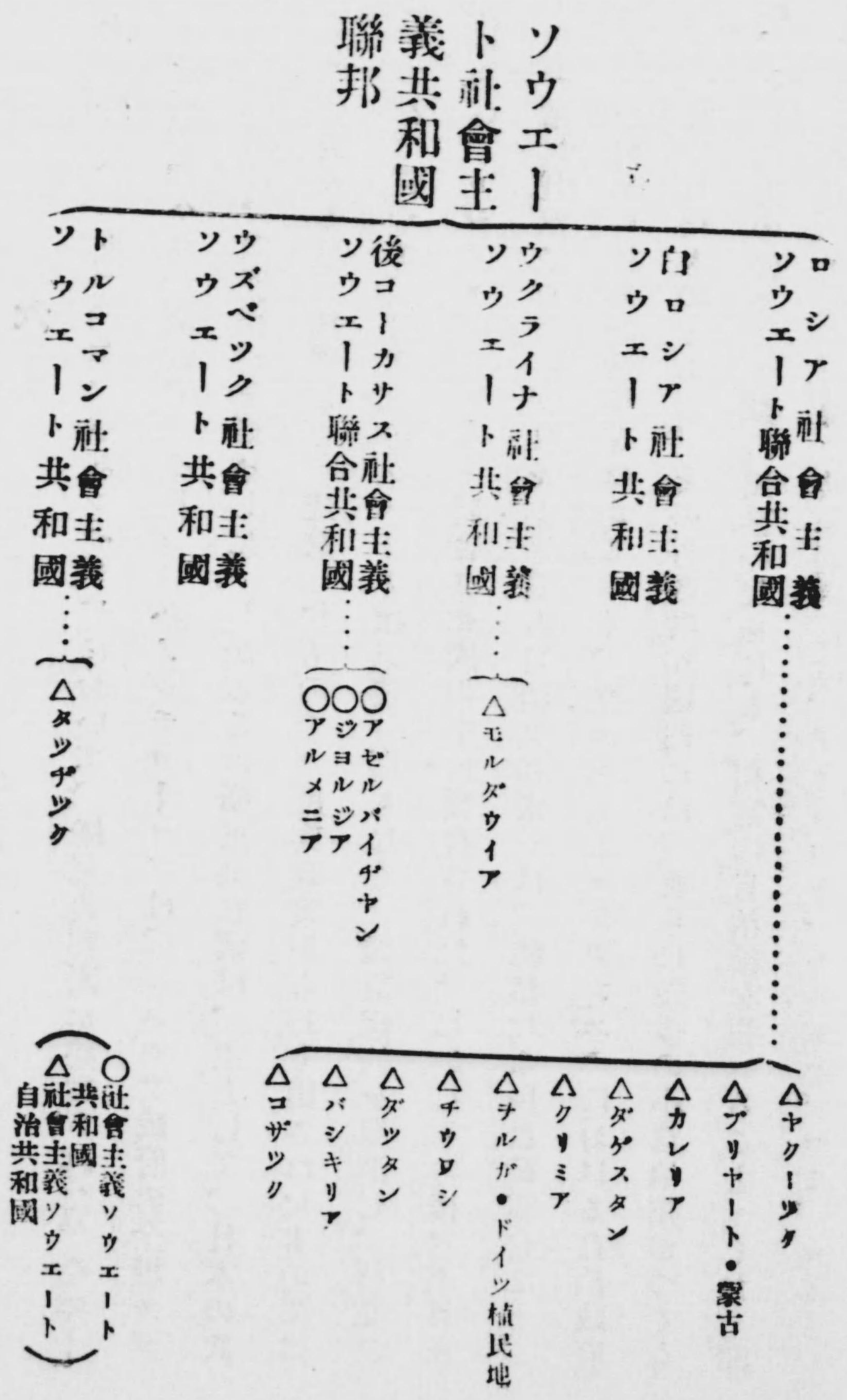
國防における孤立の悲哀を感じて、再び、モスクワ政府の治下に團結するのである。と論せる如きはいさゝか負け惜しみ論の嫌ひがあつて、「少數民族をして勝手に分離獨立せしめよ。彼等に對して寛宏の襟度を以て臨み、その自由を尊重してやるは、却てロシアをして大ならしむる所以である」と云ふレーニンの大きな放膽論とは大分趣きを異にしてゐる。

## 五

昨年春、私のモスクワ滞在中、第三次聯邦ソヴェト大會（聯邦政治の最高機關）が開かれた。而してこの大會はその開會の劈頭において、聯邦政治上頗る重大なる一つの議案を可決した。それは聯邦内に新たに二つの獨立共和國を加へたことである。聯邦大會はトルキスタンにおいて、ウズベツク及トルコマン兩共和國の新設を正式に承認した。トルキスタンはゾアール時代、トルキスタン總督の高壓政治の下に、幾多の小民族が奴隸状態におかれ、數百年來、既に全く民族的存在を失つてゐた。たゞ僅にヒーワお

よびプハラの二王國だけが、沙漠の中のオアシスの如く、半獨立國の状態を存續してゐた。しかるにスターリン（當時の勞農内閣民族總長）の鐵腕一度動き出すや、ヒトワおよびプハラの二王國はたゞころに消え失せ、トルキスタンの砂原に忽如としてウズベツクおよびトルコマンの二民族が復興し、二つの新共和國が建設された。そしてこの二つの共和國はロシア本土および小ロシアと同格をもつて、ソウエート聯邦に加入し、聯邦の憲法により、兩共和國のソウエート議長は同時にソウエート聯邦の中  
 央執行委員長、即ち勞農大統領に選ばれた。

かくして現在のソウエート聯邦はロシア。ウクライナ。白ロシア。コーカサス。ウズベツク及びトルコマン。即ち六ヶの獨立せるソウエート共和國の聯邦であつて、更らにロシア聯合共和國の中には十ヶの自治共和國、又コーカサス聯合共和國は三ヶの共和國、ウクライナ及びウズベツク共和國は各々一ヶづゝの小自治共和國を包容してゐる。これを圖表に示せば左の如くである。





六

右の外に、一九二〇年、東部シベリアにおいて、極東共和國が建設された。今年十月十五日、全共和國政府の全権クラスノシチョーコフは、モスクワ政府の全権カラハントの間に、同盟條約を締結した。しかしこの極東共和國は、主として、日本の武力干渉に對する緩衝地帯として建設したもので、民族政策からわり出されたものではなかつた。従つて、日本軍のシベリア撤退後、間もなく、同盟條約を取消し、極東三州は再び、ロシア・ソウエート聯合共和國の中に併合された。しかしその後バイカル湖岸一帯に建設された「ブリヤート蒙古自治共和國」は、純然たる民族政策により、兩民族のために民族的發展をはかるべく、ウエルフネ・ウヂンスクにおける自治政府の下に統一したものである。その外各共和國內には、更らに幾多の小自治州がつくれ、その地方の極めて少數の民族のためにも、相當の自治權を與へることゝした。即ち、ロシア・ソウエート聯合共和國內には、オイラット。キルギス。コミ。マリ。

カルムイク。ヲーツ。カーラ。カルバツト及び北部コーカサス諸民族のために、後コーサス・ソウエート聯合共和國內にはナゴール・カルピヤフ及び南オセチン族のために、それ／＼小さいな自治州が設けられてある。

七



トルキスタンの土民からソウエート聯邦最高政治機關の首腦の一人にあげられた  
アフン・ババエフ

前記六ヶの獨立共和國中、ロシア及びウクライナの二つは、帝制時代のロシア帝國の支配民族であつた大ロシア人及び小ロシア人の版圖であつて、現に前

者は人口においても、文化及び經濟上においても、他の共和國に比し、絶對的優越の地位をしめてゐる。而してその他の四つの獨立共和國は、白ロシアを除き、のこりの三つは悉く東洋民族國であつて、從來ゾアの専制と、ロシア人の支配權の下にその

文及び經濟上の發展を阻害され、久しく半開状態におかれたものである。その地域は廣大だが、その人口においては大ロシア及び小ロシアに比して遙かに少數である。今ソウエート聯邦を形成する六個の獨立共和國の人口を比較するに、左の如くである。  
(一九二五年度統計)

共和國名	人	%
ロシア	九六、七四六、三〇〇	六八・九
ウクライナ	二七、六三六、九〇〇	一九・一
白ロシア	四、二〇四、五〇〇	三・二
コーカサス	五、四二一、〇〇〇	四・一
ウズベツク	四、八〇三、六〇〇	四・〇
トルコマン	九一四、六〇〇	〇・七
計	一三九、七五三、九〇〇	一〇〇・〇

然るに、ソウエート聯邦の憲法は是等の六國を以て、同等の地位におき、各共和國のソウエート議長は、同時に聯邦ソウエート議長(即ち聯邦大統領の格)たることゝなつてゐる。現にソウエート聯邦の元首格たる中央執行委員長は左の六人である。

カリニン	(ロシア)
ペトロフスキー	(ウクライナ)
チエルウヤコフ	(白ロシア)
ムサベイコフ	(コーカサス)
アフン・ババエフ	(ウズベツク)
アイタコフ	(トルコマン)

この六人の中、ムサベイコフ以下の三人はアジア人であつて、彼等の名はつひこの頃まで、誰も知らなかつた。彼等は突如として、コーカサスの山、トルキスタンの砂原から、あらはれ來たつて、クレムリンの主人公となつたのである。そしてソウエート

聯邦中央政府の政令は、時折ムサベイコフや、アフン・ババエフ等の署名の下に發布される。

大ロシアを號令する政令が、久しく殆んどその民族的存在を忘れられてゐたコーカサスやウズベックもしくは、トルコマン人の手で署名されやうとは、十月革命前にあつては、夢にも見られぬところである。

## 八

ソヴェート聯邦政治の、最も特色とするところは、その「風がわりの兩院制度」である。

ソヴェート政治は當初、一院制を採り、かつボリシエウキキーは同制を以てソヴェート政治の最も誇るべき特色となしてゐた。即ち普通の資本主義國では、人民の代表機關たる衆議院の外に、特權階級の機關たる貴族院なるものがあるが、勞農國には、たゞ勞働階級の機關たるソヴェート一院あるのみだといつてこれを誇りとしてゐたの

である。しかるに一昨々年ソヴェート聯邦組織の變更と、同時に新たに發布された憲法によると、ソヴェート政治もまた兩院制を採つてゐる。たゞし、それは無論貴衆兩院ではない。新憲法第十二條に聯邦ソヴェート中央執行委員會は「聯邦ソヴェート」及び「民族ソヴェート」の二つから成るとあり、第十五條に「民族ソヴェート」は聯邦の各邦および各自治民族共和國の代表を以て組織すとある。即ち從來の勞働ソヴェート（階級を基礎とする）の外に、も一つ民族代表のソヴェートが出來たのである。しかしこの民族代表ソヴェートには、無論大ロシア共和國や、ウクライナ共和國等斯拉ヴ民族の代表も參加してゐるが、同時にバシキール。ダツタン。ブツヤートなどの弱小民族もまたそれ／＼代表者を出してゐる。新憲法の特徴はロシア領内において從來最も微力で、且つ常に斯拉ヴ民族の爲に壓迫されてゐた東洋諸民族の代表のために思ひ切つて大きな發言權を與へた點にある。即ち民族代表ソヴェートにおいて、人口九千五百萬の大ロシア共和國と、二千六百萬の小ロシア共和國の民族代表は、人口僅

に四百八十萬のウズベック、もしくは九十一萬のトルコマン共和國の民族代表と、同数の發言權を持つことゝなつてゐる。

## 五 露領アジアの文化的復興

埋没せる民族の蘇生・トルコ語のローマ字採用・雜誌「新東洋」・中央アジアに新文明國の建設・ソウエート大會傍聽の印象・アジア化するロシア・「赤化」の「實物宣傳」

ソウエート政府は、かくして聯邦内における東洋諸民族に對し、その自治權を承認し、共和國をつくらしめ、大にその政治的復興を促したが、これと同時に、これ等の諸民族のために、さかんに經濟上の實質的援助を與へることに對しても、多大の努力を傾倒した。たとへば、コーカサス及びトルキスタンにおける人工灌漑の如き、毎年モスクワ政府から巨額の經費を支出し、大規模の工事をすゝめてゐる。又、モスクワや、レーニングラード等の中央都市にあつた幾多の工場を、チフリリスや、タシケントに移轉し、地方ソウエートの手に讓渡した如き、その最も顯著なる例である。但し、ソウエート聯邦内の東洋民族間における自治政治の效果の、最も著しく、且つ興味ある點は、その文化的向上にある。

x x x x x

私が昨年、南ロシアから、コーカサス方面を旅行したときその日／＼の新聞を汽車の

到着する驛々で買つて行つたが、新聞の用語が毎日變るので、わづか二週間の汽車旅行中、ウクライナ語。ジョルヂヤ語。トルコ語。アゼルバイジャン語等、十數種の言葉の變つた新聞を買ひ集めた。

ツアー政府は、極端なる汎スラヴ主義の標榜の下に、ロシア全國を通じて、大ロシア語の使用を強制し、同じスラヴ民族で、三千萬の人口を有するウクライナ即ち小ロシアですら、學校及び諸官衙において、小ロシア語の使用を禁じた。

これに反し、ソウエート政府は「民族自決主義」の決行と共に、各地の異種民族に對し、學校、法廷、官衙、新聞、藝術その他各方面において、各自の民族語の使用を奨励した。

小數民族の中には、あまりに長い間、ツアー政治の壓制下にあつた爲に、殆んどその民族的存在を失ひ、その文化を全く滅却し、民族語を忘れたものもあつた。こゝにおいて、ソウエート政府は、革命の初め、勞農文相ルナチャルスキーをして、民族文化

の復興計画をたてしめ、十月革命の直後から、一九二一年にかけて、コーカサスのバクレー及びチフリスの兩市にはアゼルバイジャン。トルコ。ヂョルヂア等の諸民族のため、トルキスタンでは、タシケント及びサマルカンドにおいて、ウズベック及びトルコマン民族のため、シベリアでは、ウエルフネ・ウヂンスクを中心として、蒙古及びブリヤート民族のため、ヤルガ沿道ではカザン市において、ダツタン民族のため、それ／＼幾多の學校、圖書館、俱樂部、劇場、新聞等を増設し、各自の民族語を以て、教育と藝術の發展策を講じ、久しく埋れてゐた民族文化復興の大事業に着手した。

私がバクレーでトルコ語の新聞「チュルクスキー・コンミュニスト」社を訪ねたときその社長は「初めてトルコ語の新聞を發刊した時は、トルコ人の多くがトルコ語を忘れ、トルコ語で新聞を読み得るものが甚だ少なかつた。ために、讀者の範圍が局限され、經營頗る困難を極めた。しかし、トルコ語の學校開設、その他民族教育の振興につれて、新聞の發行部数は逐年増加し、近頃では、已に數萬の讀者を有するやうにな

つた」として、民族文化の埋没によつて受けた發刊當初の新聞經營難をもの語つた。

## 二

ソウエート政府は、かく少数民族のために、その地方において、民族文化の復興をはかつたと同時に、モスクワ及びレーニングラドにおいて、更ら／＼各少数民族の青年秀才のために、高等若しくは特殊の教育を授ける目的を以て、幾多の専門學校を開設したが、その中で最も特色あるは東洋勞働共產大學である。同大學はロシア共產黨首領スターリンを名譽校長にいたゞき、前項記載の同氏の演説にもある通り、一つはソウエート聯邦内の東洋民族のソウエート幹部、も一つは、聯邦外の東洋諸國における革命の指導者を養成しつゝある。本年迄に已に五百余名の卒業生を出した。

も一つ、東洋文化の機關として特筆すべきは、パウロウイツチを會長とする東洋協會である。同協會の機關「新東洋」は、極めて眞面目な東洋研究雜誌であつて、學術上から見ても、立派な資料である。

最近發刊の同誌第十二號において、協會長パウロウイツチは「十月革命後におけるトルコ・ダツタン民族の文化的發展」と題し、ヲルガ沿道。コーカサス。トルキスタン及びシベリア各地の東洋民族間における學校の増設、書籍の増刊、演劇の勃興等について精細なる統計資料を根據とした記事をかゝげてゐる。この記事の中で特に私の興味をひけるは、トルコ文字の改良に關する點である。ソウエート聯邦内におけるトルコ種族間、「トルコ文字を廢してローマ字に代へよ」との議論が大分有力になつて來た。たゞこの説には、依然トルコ文字存續説を固守してゐるソウエート聯邦外の同種族の反對がある。けれどもソウエート政府が、頻りに此の改良を獎勵してゐるので、或は近き將來において、トルコ文字が、ローマ字にかへられる時期が來るかも知れぬいよ／＼さうなれば、いつまでも、面倒な漢字を固執してゐる日本人や支那人は、ソウエート・トルコ人に先きをこされてしまふであらう。

ソウエート政府の民族語獎勵について、こゝに附記しておき度いことは、同政府が同時にエスベラント語を獎勵してゐることである。(但し、後者の獎勵は今日のところ成績甚だあがらぬ)民族語と世界語との同時獎勵は、一見甚だしい矛盾の如くであるがこれも亦、恰かも各民族に自治權を與へて、獨立國を作らしめると同時に、ソウエート聯邦の中に、是等の獨立國を包容すると同一筆法であつて、ポリシエウイキーの世界政策は、各民族に對し、政治、經濟、文化の各方面にわたつて、一方、その分離自治、獨立を促すと、同時に、他の一方、これを、ひきつけ、包容し、團結せしむるものであることを見るのである。

も一つ、聯邦領内の東洋民族にとつて、特筆すべき文化的革命は、婦人顔被の弊風が根本的に廢止されたことである。ポリシエウイキーは「チャルダ」(婦人の顔を覆ふ黒布)を以て「奴隸の表象」となし、回教僧侶の大反對を排して、これが廢止を敢行した。



顔を脱いだトルコマンの女



三

昨年訪露の折、私はウズベック共和国のモスクワ駐在代表イスラモフを訪ひ、「新共和國」の建設を祝し、中央アジア民族の発展を祈る旨を述べたところ、イスラモフは欣然として、私を迎へ、トルキスタンにおける現状について左の如く語つた。

ツアー専制時代、われ等東洋諸民族は中學程度の學校にも入學を許されなかつたわれ等は全く世界の文明から遮断されてゐた。文明の進歩から落伍したトルキスタンの農民は、芝居とはなにか、工場とはどんなものかを知らなかつたほど「無智の暗黒」につままれてゐた。

然るに、われ等は今や、自治権を確得し、文化と産業の開発に向つて進みつゝある。われ等は各地に幾多の學校を開設した。タシケントには大學を創立した。又八百名の學生と三百名の兒童をモスクワに送り、更らに五十名の青年を獨逸に留學させてゐる。われ等はさきにモスクワから譲り受けた工場において、自らトルキスタ



ン産原料品の加工を開始した。トルキスタンの棉花の産額は現に已に戦前の八割五分に達し、二三年の後にはソウエート聯邦の需用全部を充たし得るに至るであらうわれ等は又各地に多数の劇場、俱樂部、圖書館等を開設した。

かくして、中央アジアは、たゞに經濟上のみならず、文化上においても、急速に向上しつゝある。數年の後、世界は中央アジアにおいて、新らしい文明國を見出すであらう……。

× × × × ×

又、私は勞農外務省の極東部長メリニコフとも、民族文化問題について語つたことがある。同氏の曰く

民族文化の發達は、各民族が自由をかち得た時において、始めてこれを實行し得る歐米列強の帝國主義の壓迫下にあつては、弱小民族は滅亡する外ない。されば、われ等は聯邦内のすべての民族に對し、その大小を問はず、普遍的に自治權を與へた

……たとへば人口僅かに二十五萬に過ぎないオイラット族に對してすら、自治權を與へた……。

#### 四

近年、私のロシアを旅行する度毎に、最も痛切に感ずることは、ロシアの年々アジア化して行くことである。第一、シベリア、コーカサスおよびトルキスタン方面の鐵道旅行をすると、汽車の旅客の半ばは黄肌黒髪のアジア人である。第二、モスクワの如き中央の都會における流行の上に、東洋の風習と色彩が、著しくあらはれて來た。茶腕形のウズベツク帽が、モスクワの昨今の流行の一つとなつて、若い女工などが、さかんにかぶり出すといふ勢ひである。私は昨年を訪露に際し、モスクワの大オペラ劇場のベートーベン室で、一夕外務省の招待で、トルコマンの笛、バシキールの胡弓、ウズベツクの歌など、東洋音樂團の奏曲を聞き、まことに深い感興に打たれた。

又ある日、私は國立大劇場の「東の夜會」に招かれた。これはコーカサスのモスク



ヤ氏は著者に語つた：「日本とトルキスタンの音楽には幾多の共通点がある。いつか日本へ行つて、貴國の音楽家と合奏して見度い。中央アジアの藝術復興については、日本に學ばねばならぬ」と。

ワ留學生のために寄

附金募集の夜會であ

つた。特に外交總長

チチエリンと、教育

家と合奏して見度い。

總長ルナチャルスキ

の二人が舞台にあ

らはれ、東洋民族のために、萬丈の氣焔をあげた時は、拍手喝采、滿場崩れんばかりの賑ひであつた。二總長はともに東洋問題を、文化と政治經濟の二方面から觀察を下し

……ソヴェット聯邦は東西兩洋の連鎖たるべき運命をもつてゐる。

……一朝西歐の資本列強と事をかまへる時、東洋諸小民族はたつてソヴェット聯邦と

共同戦線に立つであらう。

ソヴェット聯邦の文化は、速からず世界に冠たらねばならぬ。何となれば舊き東

洋の文明と、新らしい西洋の文明とを、併せて同化するであらうから……

などの言々句々は滿場をうならせた。二總長の演説終るや、舞台いつばいにコーカサス各地の素人と玄人とりませの音楽隊二百餘名があらはれ、歌ふ、舞ふ、笛を吹く、琴をかなでる……それはく賑やかな、愉快な、そしてロシアにおける東洋藝術新興の表兆として、頗る有意義な夜會であつた。

× × × × ×

私が昨年モスクワを訪うた時、折よくも、第三次聯邦ソヴェット大會が開かれ、私は親しく同大會を傍聽する機會を得た。

大會は例によつて國立大劇場に開かれ、舞台は、幹部席と演壇に、觀覽席は勞農議員席に、そして舞台前のオーケストラ場が、新聞記者席にあてられてある。新聞記者席から、舞台面と觀覽席を眺めると、勞農議員の風貌、殊にその出身民族の色々變つた風俗が目につく。油じみた皮革服の勞働者、髯莽々の農民、赤く圓いトルコ帽をか

ぶつたアゼルバイジャン人、長い羽織のやうな上着をつけたパシキール人、金箔を縁  
 ひつけた茶碗形帽のウズベック人など……百姿千態の風俗はまるで人種展覧會を観る  
 かの感がある。

會議の休會中に、胸に小さい劍をならべたコーカサス服の一議員が、新聞記者席に  
 やつて来て、數枚の書きものを、私にさし出し、「この記事を君の新聞にのせてくれぬ  
 か」とたのむ。私はあまりに突然なことなので、「自分は日本の新聞記者である」と話  
 したところ、彼も亦驚いて「實は君を同郷——コーカサス——の新聞記者だと思つた」  
 とて頗るさまりわるさうな風であつた。

しかし、かゝる誤解のおこるも、畢竟ソウエート議會そのものが、極度にアジア化  
 した反映に外ならぬ。今日のロシアにとつては、東洋人は少しも珍らしくないのであ  
 る。否な、東洋人自らが「ロシアの主人公」になつてゐるのである。日本人も、支那  
 人も、ウズベックや、トルコマン人と區別がつかないほどに、互ひに慣れてしまつた

のである。

即ち、第一、勞農議員の殆んど半数は東洋人である。第二、邦聯を形成する六ヶ國  
 中、三つは、東洋民族國であつて、聯邦大統領格たるソウエート中央執行委員長も亦  
 六人の中、三人までが東洋人である。而して、第三、聯邦政治の最高政權を握り、「第  
 二のレーニン」と云はれてゐるボリシエウイキーの巨頭スターリンその人も亦東洋人  
 である。

私が昨年を訪露に際し、スターリンと語つた折、この巨人から受けた最も強い印象  
 は實に、彼が「私もアジア人です」と語りつゝ、私に握手を與へた時の瞬間であつた  
 私はこの時たゞに、スターリンその人がジョルジア人出身で、黒い髪の毛と黒い目玉  
 の持主であり、黄ばんだ顔色は日本人そのまゝの、牛糞のアジア人であることをまの  
 あたりに見知つたばかりでなく、同時に又、このアジア人たるスターリンの掌中に政  
 權を握られたソヴェート・ロシアの國そのものも亦アジア國である……即ちスターリ

ンの「私もアジア人です」といつた言葉は私の耳に「ロシアも亦アジア國です」と響いたのであつた。

× × × × ×

由來ロシアは半歐半亞の國であつた。たゞ大ロシア人の勢力と、そのパンスラヴィズムの風潮とは、ロシアをしてヨーロッパ國の觀あらしめたのであるが、今やその政權をアジア人たるスターリン等に握られ、憲法において、すでにトルコマンや、ウズベック民族をして、大ロシアおよび小ロシア共和國のスラヴ民族と同等の權力を持たせたソヴェート・ロシアは、いよいよ半歐半亞國の正體をあらはして來た。加ふるにボリシエウイキーの「西守東進」方針と、東洋民族政策とはいよいよロシアの對亞勢力を擴大せざるを得ない。從來アジア民族中の最進國をもつて自ら任じてゐたわが日本の如き、やゝもすればシリへにしかれてしまはぬともかぎらぬ。

## 六

これを要するに、ソヴェート政府の聯邦内の東洋民族に對する政策は、先づ

一、民族自決主義に出發して、各民族の分離をゆるし、その「獨立」を認め、同時に  
二、これ等「獨立」國の共產黨をして、各自國の「獨立」政府の實權をその掌中に握らしめ、以て

三、各「獨立」國內の政治をソヴェート化し、時機の熟するを待つて「分裂」から、再び「團結へ」引きもどし、今日の「ソヴェート聯邦」の建設に漕ぎつけた。而して  
四、ソヴェート聯邦組織の完成後は、民族文化の復興に着手すると同時に、益々ソヴェチズムの徹底をはかりつゝある。

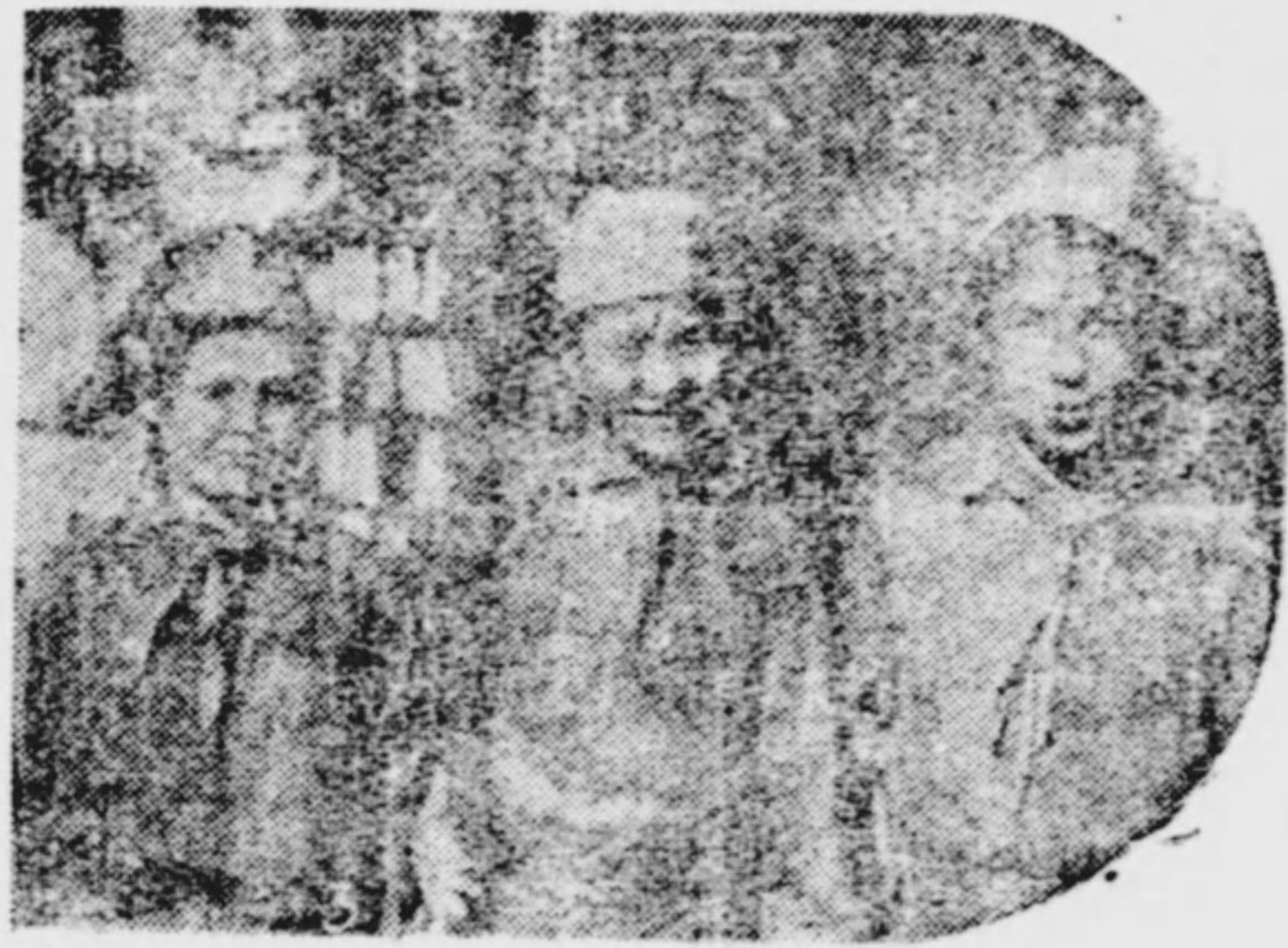
而して、この民族政策の目的とするところは、各民族の向上發展によつて、ソヴェート聯邦全體の富強をはかり、レーニンの云へる如く、彼等の間に「世界革命の豫備隊」をつくるにあるのである。但し、私はこゝにも一つ此の政策の目的として重大な

る計劃のあることを特記しておきたいと思ふ。も一つの重大なる目的とは何であるかそれは即ち、これ等聯邦内の東洋民族共和國を以て、聯邦外の同種族に對し、ボリシエウイキーの所謂「世界革命の正攻法」とも云ふべき「實物宣傳政策」(聯邦領内の已に赤化した民族を手本として、その隣境の同種族にこれを宣傳し、彼等をしてこれにならはしめるのである)に用ひんとすることである。更らにこれを詳しく云へば、聯邦領外の東洋民族國に對し、積極的に、その國にふみこんで「赤化」運動を進めることが出来なくなつた場合、退いて先づ聯邦領内の東洋民族を徹底的に赤化し、然る後徐ろに、その隣接國の同種族をして、これに倣はしめるのである。換言すれば、東洋「赤化」の強襲が失敗した場合、これが「正攻法」として、この「實物宣傳政策」を用ふるのである。

現に、コーカサスにおけるアゼルバイジャン。ジョルジア及びアルメニアの三共和國の建設と、その文化及び經濟上の發達は、その南境のペルシア及びトルコにおける

同種族の「赤化」を促し、シベリアにおけるブリアート・蒙古共和國は、その南隣の外蒙古の「赤化」策源地となつてゐる。

又、トルキスタンにおけるウズベック及びトルコマンの兩共和國の新設は、アフガニスタン。印度。支那の西藏、及新疆方面に對する「實物宣傳」たらんとし、英國當局をして、深く憂慮せしめつゝある。蓋し、印度の隣接地において、同種民族が自由を勝ち得て、新しい自治の下に、文化と産業に向つて進まんとする勢ひは、印度人にとつて、何より強い刺戟であり、又何より有効な宣傳たらざるを得ない。



ウズベックの少年赤ネツタイ隊

のトルコマン人が、ロシアにおけると同様の政權を得やうとして、暴動を初め、ペル

シア政府をして、手をやかさせたことがあつた。

× × × × × ×

以上はソウエート聯邦領内の東洋民族に對する政策の梗概である。然らば聯邦領外におけるソウエート東洋民族政策は如何。

ソウエート政府は、たゞにアジアのみならず、アフリカ及びアメリカにおける弱少数民族にもかなり手廣く、その「赤化」政策を行ひつゝある。アフリカでは最近フランス及びスペインと戦つたモロッコに對し、終始熱烈なる同情をよせ（ひそかに物質的援助を與へたと云ふ説もあるが、その眞否は明らかでない）、又埃及にはかつてヨツプエに隨行して日本にも來たことのあるゴルドマン等が、商務官として、カイローに駐在し、つねに英國官憲の神經を尖らせてゐる。米國においてはかねてからメキシコに着目し、つひ一月ばかり前、女流外交官として有名なるコロンタイ女史が、同國駐在大使に任命された。その外アラビア及び南洋諸島等にも、ひそかに「赤化」の手をひ

ろめ、現に蘭領印度諸島には共産黨、勞働組合、鐵道工夫同盟等が組織され、タン・マラツカ、ハツヂミスバフ等の指導下に、一萬三千人の共産黨員が、ひそかにその活動をつゞけてゐる。

しかし、ソウエート政府のこれまで、最も熱心に力を入れ、又入れつゝあるは、トルコ。ペルシア。アフガニスタン。印度及び支那の五國であるとせねばならぬ。以下數項にわたり、近東、中東及び極東における前記五國の「赤化」政策を記述して見やう

## 六 トルコ革命とロシア

歐洲大戦後のトルコ・オットマン帝國を葬る前の吊鐘・英

國の四海征服計劃・ケマル・パシヤ・希土戦争とロシアの

對土援助・露土同盟條約・「双頭鷲」と「鎌と槌」・トルコ

「赤化」の限度・トルコ政治の民主化・露土保障條約・露土

の文化的接近

歐洲大戦直後のトルコは、殆んど、亡國の運命に近かつた。ヨーロッパ・トルコは聯合軍の蹂躪するところとなり、首府コンスタンチノーブルは、全く英國の掌中にあつた。トルコ軍は、アジア・トルコの奥深くに敗退して四方に潰亂離散した。間もなく、ギリシア軍のスマルナに上陸するとともに、アジア・トルコも亦危殆に頻し、ムードロス會議、サン・レモ會議、セーヴル會議など、會議を重ねるごとに、オットマン帝國の獨立の影が薄すらいで來た。

× × × × ×

當時の近東は、全く英國の獨り舞台であつた。ドイツの勢力は、根抵から破壊されロシアも亦、革命の直後、手を外國に延ばす餘裕がなかつた。戰勝國のフランスすらライン占領に没頭し、その對獨策について、英國の援助を得んがため、近東のことは擧げて、これを英國の手に委ねざるを得なかつた。英國の憚られるはたゞ、米國だけ

であつた。ウイルソン大統領の標榜せる「併合なしの平和」殊に一九一八年一月八日の十四ヶ條の宣言書中の第十二條において

現在のオットマン帝國を形成する各領地は不可侵の主權を保持すべきものとす。と主張せるに對しては、流石の英國も、眞向から反對する勇氣がなかつた。即ちトルコに對しては、直ちに自ら手を下して併合しやうとはしなかつた。しかし、そのかわり、ギリシアを傀儡として巧みにこれを縦横し、ギリシアを手先きに使つて、トルコ侵略の計畫をすゝめた。

當時、英國政治家の胸中にはたしかに、戰勝の勢ひに乗じて、トルコを併呑し、更らにペルシアを手に入れ、以てムラモル海、黒海、裏海、及びペルシア灣の制海權をあげて、わが掌中におさめ、大英帝國の海上霸權を完成せんとすの計畫がめぐらされてゐたことは疑をいれない。その後間もなく英國外交の大努力によつて締結されたセーヴル條約は實に、この計劃實現の第一歩と見るべく、同條約の締結された時、英國の

朝野が「ロイド・ジョージと、カーゾン卿とは、實に往年ジスレリー卿の手腕をもつてしてなほ果し得なかつた四海征服の雄圖を完成した」として隨喜せるも、まさにそのところであつたのである。

## 二

一九二〇年八月十日のセーヴル條約は、實に、トルコを「葬る前の弔鐘」であつた。オットマン帝國の運命は、全く風前の燈であつた。もしセーヴル條約にして、その文面通り、實施されたならば、トルコは再び起つことが出来なかつたであらう。

英國はこの條約の批准を待つまでもなく、既にトルコを併呑した氣分で、コンスタンチノーブルに腰を据ゑ、反英派を逮捕したり、追放したり、あらゆる暴威を逞しうした。英國の後援を肩に着たギリシア軍に至つては、全く虎の威をかる狐で、スマルナに上陸するや、ドシ／＼大手をふるつてアナトリアの奥地に侵入し、一舉にアジアトルコの死命を制せんとした。



しかし、トルコの運命は、まだくつきてゐなかつた。この危急存亡の秋、敢然、瀕死の半月國を救はんとして起つた英雄がある。それは云ふまでもなくケマル・パシヤその人である。

## 三

一九二一年一月、ケマル・パシヤは、アンゴラに敗殘兵を集め、ギリシア軍に對し



ヤシバ・ルマケ

猛然攻勢に轉じた。そして一月十一日慘憺なる激戦の後、見事にこれを撃退した。しかし、この時さすがのケマル・パシヤも千慮の一失で、勝つて兜の緒をしめることを忘れた。

負けたギリシアは、同年の春から夏にかけて、全國の大動員を行ひ、八月再び捲土重來し、アナトリアの正面に向つて攻勢をとつて來た。當時の希土戦争は、土軍も國運を賭して戦つたが、希軍も亦、國力を擧げて奮戦した。殊に、希軍の背後には、英國

が控え、ギリシアの要求するまゝに、ドシ／＼軍費と武器を與へて援助した。土軍は敗退また敗退して、希軍は、つひに、アンゴラの西方百キロメートルの線に肉迫して來た。アンゴラ政府の運命は旦夕に迫つた。

ケマル・パシヤが「わが軍には最早や防備線がない。土塊の一つ一つにしがみついて固守する外はない」との悲壯な命令を下したのはこの秋であつた。

しかるに、不思議や、ト軍を最後の防備線におひつめた希軍は、もう一息と云ふところで、俄かにその攻撃力をにぶらした。それと見るより早く、ト軍は、何處から援助をうけたものか、敢然、逆襲に轉じ、二十一日間の激戦の後、遂ひに、負けかゝつたト軍は、勝ち誇る希軍を最後の戦線で撃破した。

一九二一年秋の希土戦争は、實に、瀕死のトルコを救つたものである。而して、この戦争におけるト軍の戦勝は、勿論主としてケマル・パシヤの雄略と、トルコ兵の愛國心によつたとせねばならぬが、しかし又五年間に亘る歐洲大戦争で弱り切つた敗

残のトルコ軍が、何等、外からの援助なくして、勝ち誇る大英帝國を後援とするギリシア軍を撃破し得る筈がない。

そこには、實に、ソウエート・ロシアの力強ひ援助のあつたことを看過してはならぬ。當時歐洲の評論家中には「一九二一年の希土戦争は、表面、ギリシア軍とトルコ軍との戦争であつたが、内實は、英國とロシアとの戦争であつた」との批判を下したものがあつた。

## 四

十月革命後、ソウエート政府は、被壓制民族に對する民族自決權の宣言を發表すると同時に、特に、トルコに向つて「君府はトルコの手に残すべし」との聲明を發したこの聲明は實に、ビーター大帝以來、君府占領を國是の第一としてゐた露國の國策を一變し、露國を以て歴史的敵國と目してゐたトルコ人に對して、非常な好感と與へたやがて、レーニンとケマル・パシヤは、遙かに提携の手をのべ、モスクワとアンゴ

ラの間は一脈のの諒解が通じた。一九二一年三月十六日には早くもモスクワに於て勞農外相チチエリンと、アンゴラ政府の外相ユースフ・ケマル・パシヤとの間に、露土同盟條約の締結を見るに至つた。

× × × × × ×

露土同盟條約！それは、實に、ツァー時代においては、夢にも見ることの出来なかつたところで、露土國交上の一大變革である。恐るべき革命の力は、幾世紀來の歴史的仇敵を轉じて同盟國たらしめた。露土同盟條約締結の日、アンゴラ駐在の赤露全權ナザレヌスは

セント・ソフキヤ寺院の半月章上に、十字架を掲げんとは、ツァー及びロシア貴族の野心であつて、ロシア國民の希望ではなかつた。新ロシアの國民は、ツァー政府によつて締結されたあらゆる侵畧的條約を廢棄し、その外交政策を根本から改變することに決した。かくして、ロシア國民は、今や、自國の自由と獨立のために戦ひつ

、あるトルコと握手し、その同盟國となつた。

との聲明を發し、トルコ國民をしてやんやと狂喜せしめた。

### 五

一九二一年三月十六日の露土條約は、その冒頭において、

露土兩國政府は、兩國民族間の同胞主義及び民族自決の權利を尊重し、兩國民間に反帝國主義の戰爭における利益の一致を認め、又締盟國の一方のためにこれら國難は、必らず他の一方の地位を危ふくするものなることを考慮し、兩國間不斷の國交と、兩國雙互の利益を根底とする誠意の友情關係を設定せんとする切なる希望にかられ、こゝに修交及び同胞主義の條約を締結す。

と記し、尙ほ條約本文中の重要な個條を抄譯するに

第一條 締盟國の一方は、他の一方に對して無理に強ひられたるあらゆる國際條約を承認せず。トルコに關する國際條約にしてアンゴラ政府によつて承認されざるもの

は、勞農露國も亦これを承認せず。

第四條 兩締盟國は、東洋諸民族の解放運動と、ロシアの勞農階級の新社會組織建設運動とが、互ひに連繫すべきものなることを考慮に入れ、こゝに嚴肅に、東洋諸民族の自由と獨立及びその各自の希望する政體を選ぶ權利を承認す。

第五條 兩國政府は海峽開放及び各國商船の自由航行を保障せんがため、沿海諸國の特別全權會議をして、黒海及び海峽の國際法則の作製に當らしむることに合意す。但し、右會議の決議は決してトルコの主權を侵害し、又トルコ及びその首府コンスタンチノーブルの安全を危ふくすることあるべからず。

第六條 兩國政府は、凡べての舊條約を以て兩國相互の利益に反するものと認め、全部これを廢棄することに合意す。ソウエート政府はトルコのツァー政府に負へる債務全部を無効と認む。

第七條 ソウエート政府は、治外法權を以て自由民族の發展及びその國の主權の完全

なる行使と相容れざるものと認め、同法權を無効とす。

とあり、條約の名稱は「修交條約」であるけれども、その内容はたしかに「同盟條約」である。而して「東洋民族の解放」と「露國の勞農革命」とを結びつけ「民族自決權」を尊重確認したるは、主として、トルコがソウエト政府の東洋民族政策を容れたものであるが、そのかわり、ロシアはトルコに對する債權、治外法權その他の特權を抛棄し、トルコのために大なる精神的及び物質的の援助を約した。尙ほ附帶條約においてロシアはトルコのために有利なるコーカサス國境改變の約束を與へ、今年九月二十六日カールス市において、露國は、ツアー政府時代に侵畧した領土を悉くトルコに返還した。のみならず更らに黒海を越へて、どし／＼アンゴラ政府に武器、彈藥、食糧、その他の物資を供給した。更らに又ケマル・パシアの許へは、今現に廣東政府の最高顧問として活躍してゐるポロヂンを始めとし、幾多手腕の卓越せる顧問を派遣し、その帷幄に參劃せしめた。

も一つ、露國のトルコに與へた大なる援助は、ソウエト聯邦内の回教民族を動かして、トルコの爲に精神的援助を與へたことである。殊に、黒海沿岸のクリミアに於て、わざ／＼回教民族のためにクリミア自治共和國を建設した如きは、如何に強く海を越へた彼岸のトルコ回教民を鼓舞し、激勵したことであらう。

## 六

ケマル・パシアが、ギリシア軍に最後の打撃を加へ、スミルナから追ひ拂らつたのは、一九二二年の戦争であつた。この時は、アンゴラ政府は、主としてフランスの援助によつた。しかし希軍に致命的打撃を與へて、トルコを危急存亡の瀬戸際に救ひセーブル條約を一片の反古と化して、英國の野謀を挫いたのは、一九二一年の戦争である。而して同年の戦争は、主としてロシアの援助によつて、始めて漸やく勝つことが出来たのである。

x x x x x

アンゴラ政府は、露佛の援助によつて、英希に勝つた。しかし、露國の援助と、佛國のそれとは、固より比較にならぬ。ロシアとは「親善にして同胞主義の同盟」を結んだのであるが、フランスとは、たゞ佛軍撤退についての協商を遂げたに過ぎない。加ふるに、佛土協商は、露土同盟より一年半おくれである。トルコはその最も苦しい時に、ロシアの援助を得た。

一九二二年ソウエート・ロシアのトルコに與へた援助は、實に、半月國の興廢を決したものであると云つても、過言でなからう。

## 七

斯くの如く、ソウエート政府は、トルコの獨立援助において、見事に成功した。たゞ、しかし、露國はこの成功の勢に乗じて、どこまで、トルコの赤化政策を進めたかゞ、問題である。當時英國の新聞などは、頗りに近東におけるポリシエウイズムの「赤禍」の危険を叫んだ。ツアアの「双頭鷲」よりも、レーニンの「鎌と槌」の方が、

トルコのために、否なトルコにおける英國の勢力のために、より多く恐るべしだと云つて騒いだ。しかし今日までの所謂トルコ「赤化」の成績から推して、露國のトルコ對策が、眞に社會革命もしくは經濟革命を目標としたものとは到底考へられぬ。勿論勞農政府が、トルコ共産黨に對して、同情し、援助し、時には背後から指導操縦したこともあり、又同黨が、コンスタンチノープルや、アンゴラにおいて、随分思ひ切つた過激なる直接行動に出でたことも事實である。しかし、トルコは何と云つても、純然たる農業國である。バルカン半島を失ひ、アジアに限られた今日のトルコは猶ほ更ら然りで、工業らしい工業は殆んど皆無と云つても過言でなく、又従つてプロレタリア階級をもたない。わづかに、君府や、アンゴラ等の都市に、散在してゐる五六百人の共産黨員では、共産革命の實現などおもひもよらぬことである。さればレーニンのケマル・パシヤと握手した當初から、露國は主として、トルコの民族獨立運動を援助し、これによりて英國の帝國主義の鋒先を挫かんことを、眼目としたものと見るべく、

直ちにレトニンがケマル・パシアの尻押して、社會經濟革命まで漕ぎつけさせやうなどいふ無謀なる野心を抱いたとは思はれぬ。

## 八

しかし、ソウエート政府は、アンゴラ政府の内治政策に對して、強き影響を及ぼしこれを幾分左傾方向に導いた事實は否まれぬ。アンゴラにおいて開かれたトルコ國民議會は、大資産階級を背後の勢力とするレフエット・パシアの保守派と、小資産階級の勢力を代表してたつたケマル・パシアの民主派の兩派分野状態にある。而して議會開會の當初、常にレフエット・パシアの率ゆる保守派が優勢な地位を占め、ケマル・パシアの勢力を以てしても、なほ民主派は常に保守派のために牽制されてゐた。ケマル・パシヤか希軍全滅の戦勝を得た時すら、アンゴラの形勢が、民主派に不利となつて、ケマル・パシヤが、急遽スミルナから、アンゴラに引つかへさねばならなかつたことさへある。又一時ケマル・パシヤは、レフエット・パシヤ派に強要されて、共產

黨員その他の過激分子を一網打盡に逮捕したこともある。その後ソウエート大使の懇囑によつて、その大部分を釋放したが保守派の勢力は、中々根強く、いつまでも國民議會の大勢を支配してゐた。たゞ漸やくこの最近の二三年、勝利は民主派の手に歸し、その結果、回教僧侶の權力に一大制限を加へ、サルタンを國外に逐ひ、つひに今日の共和政體をとるに至つた。而して、アンゴラ政府のかくの如く、左傾方向に向つたことについては、その背後にロシアの「赤化」政策の働らきが加はつてゐたことは、かくれもない事實である。かくして、ロシアのトルコ「赤化」は、第一、トルコの獨立を助成し、第二、トルコ政治の民主化を促成した。しかし、トルコが「共產主義化」したと云ふ痕跡に至つては、毫もこれを見出すことが出来ない。

もし強して、ロシアがトルコの「赤化」にあたり、「共產主義化する」といふ意味の赤化に焦せり、無暗にトルコ共産黨を煽動し、紊りにトルコの内政を攪亂したならばケマル・パシヤのトルコ獨立の偉業も、これがために半途で挫折し、その結果、トル

一八  
口は必然、國をあげて英軍及びギリシア軍の蹂躪するところとなつたであらう。而して英國の近東における勢力の恢復は、やがて黒海の侵畧となり、南ロシアに對する直接脅威となつたであらう。

### 九

ソウエート・ロシアと新トルコとは、一九二一年の條約によつて同盟國交を確定し、モスクワとアンゴラの間には頗る親善な關係が、うちたてられたことは前記の通りである。しかし、その後、數年の間には、種々の紛争問題がおこり、従つて多少の波瀾なきを得なかつた。何しろ一方は、や、もすれば保守派の勢力に制肘せんとするアンゴラ政府であつて、他の一方は同志としての義理合からしても、トルコ共産黨を助けぬばならぬ。少くとも同志を見すてることの出来ぬソウエート政府のことである。兩者の間にはどうしても多少政策の衝突を免るゝことが出来ない。しかし、「英國の帝國主義に對する反抗」の大標榜に向つては、兩國政府の利害は常に一致してゐる。

従つて、たとひ兩國の國交上に如何なる曲折波瀾がおこつても、一度兩國の前に「大英帝國の脅威」の暗影が投せられんか、モスクワとアンゴラとは、直ちに手をのべて互ひに扶けあはんとする。昨年、英國外相チエンバレン卿は、ロカルノーに列國全權を集めて、露國の南下に對する「赤化防止」を目的とする「ロカルノー協約」を締結した。同時に英國は又國際聯盟を動かして、つひにモスール問題を英國のために頗る有利なる條件の下に解決せしめた。これに對し、露土兩國は、改めてその國際的立場の同一にして、利害の同一なるを認め、昨年十二月十七日、ソウエート外相チチュエーリント、トルコ外相テウフイク・ルシヂ・ベイとの間に「露土保障條約」が締結された。同條約は本文三個條、覺書三通から成り、その大意は、ロシア又はトルコの何れか、他國と戰端を開き、または他國の侵畧を受けた場合は、中立を遵守する。兩國はお互ひに侵畧しない。兩國の何れかを目標とする政治的同盟もしくは協約を第三國と決して締結しない……といふのである。

保障條約締結以後の露土兩國は、再び一九二一年の同盟條約締結當時の如き親密なる關係に立ちかへつた。但し一九二二年頃の兩國はともに内外に敵をひかえ、國歩艱難を極めた時であつたので、兩國の相互援助は、主として政治及び軍事上に限られたが近年の兩國關係は、經濟及び文化方面においても、互ひに接近の歩をすゝめつゝある。兩國の間には屢々貿易委員が來往し、通商關係の發展をはかつてゐる。又兩國文化の接近については、トルコから數ヶ月前來、教育總長ナフイズ・アツフ・ベイ自ら、ソウエート・ロシアに來て、ソウエート教育事情の仔細な研究を續けてゐる。最近レニングラドにおける教育家の招宴において、トルコ教育總長は左の如き演説を試みた。

ロシアにおいても、またトルコにおいても、舊政府は「依らしむべく、知らしむべからず」の政策によつて、人民教育の發達を阻止し、民衆を無智状態におくの方

針をとつてゐた。ソウエート・ロシアは、トルコよりも一ト足先きに、この愚民政策を破壊し、大に民衆の文化向上をはかつた。余はトルコに在る時、われ等は、ロシアにおいて幾多學ぶべきものがあるであらうと考へてゐたが、今、ロシアに來てこの考へのあやまらなかつたことを如實に知ることが出來た。余が幾多ソウエート教育機關を歴訪して最も深く感嘆せるは、勞農子弟の教育と、あきめくら退治方法である。余が親しくロシアに來て學び得た研究の結果は、余の歸國後、大にトルコの教育發展策に適用せらるゝであらう……



## 七 ペルシアにおける英露の角逐

回教僧侶の跋扈と英露の侵畧・英國のペルシア併呑計劃の失敗・ロシアのペルシア「赤化」策・テーラン政變・「支那の縮圖」・リザ・ハンのクーデター・ペルシア共産黨・ペルシア移民の「赤化」・ペルシア旅行の印象

### 一

ペルシアは、前世紀から現世紀にかけ、内は回教僧侶の跋扈、外は英露侵畧の壓迫のために、國運衰頹の極に達した。ペルシアにおける回教僧侶は、今尙ほ絶大なる勢力を有し、國民の多數は、狂熱なる迷信に囚はれ、進んで文化の發展に向はふとしないたとへば婦人顔被の弊風の如き、今日に至るも依然として、嚴守されてゐる。

しかし、ペルシアの國家的基礎をゆるがし、その獨立を危ふくせる最大の原因は、英露の侵畧にありとせねばならぬ。殊に、一九〇七年の英露條約は、實にペルシアを英露の勢力圏によつて、南北に兩斷し、ペルシアの獨立を、根底から覆へさんとしたものである。

同條約締結の後、一九一一年十二月、露國政府は、テーラン政府に向つて、最後通牒をおくり、米國財政顧問の解雇を要求し、又一九一二年二月、英露兩國は、協同威嚇の下に、一九〇七年の英露協商の實行を強要して、ペルシア軍隊の兵數を制限し、

一九一六年八月、更らに財政及び軍隊に對する監督權を奪取した。

歐洲大戰中、ベルシアは終始中立を宣言してゐたにも係らず、獨土軍も、英露軍も遠慮なく、ベルシア領内におし入り、いつの間にかベルシアを交戦地域に引入れてしまつた。而して、一九一七年獨軍の旗色ふるはず、露國も亦、三月革命がおこり、兩國勢力の、近東一帯から一掃さるゝや、英國は今こそ、近東併呑の好機なれど、一九一九年八月九日、ベルシア政府に高壓を加へて、これと英波條約を締結した。同條約は、トルコその他の東洋諸國に對する英國の常套政策によつて、表面ベルシア領土の不可侵權を承認することをおきながら、その本文には例によつて、僅かばかりの借款を約定すると同時に、その代償として、ベルシアの軍事、財政、交通の諸機關に對する支配權を英國の手に收め、いよ／＼ベルシアの獨立權を根本から滅却せんとするものであつた。

しかし、この條約が英國にとつて、あまりに虫のよすぎたものであり、ベルシアのためにあまりに屈辱的のものであつたため、ベルシア政府は、いよ／＼批准の段になるや、俄かに國民の反抗を恐れて逃げをはつた。

當時ソウエート・ロシアは、已に國內の反革命運動を鎮壓し、漸やく力を海外にのばす餘裕が出来た。モスクワ政府は英國の横柄極まる侵畧政策に對抗して、あくまでベルシア援助の方針をとり、先づトルコに對すると同様、ベルシアに對しても、舊條約及び舊借款を撤廢するとともに、北部ベルシアから撤兵し、從來ゾアール政府の獲得し來たつたあらゆる租借權を拋棄した。

これはたゞにベルシア國民の對露感情を一新して、親露傾向に向はしめたのみならず、同時にベルシア國民の對外反感をして、英吉利一國に集中せしめた。露國はこの反英傾向に乘じ、そろ／＼ベルシアの「赤化」運動にも手を出した。

## 二

一九一九年から一九二〇年にかけてのベルシアは、一方英國の壓迫干渉、他方露國

の「赤化」運動とで板挟みとなり、極端なる混乱状態に陥つた。

一九一九年の春、裏海沿岸の北部ペルシアで、ミルザ・クチク・ハンが、反英國及び反國王の旗をおし樹て、獨立共和政府の建設を宣言し、一九二〇年には、レシト市を中心し、裏海沿岸のギラン地方一帯に勢力を張つた。ソウエート政府は、最初、クチク・ハンが革命亂を利用せんとしたが、クチク・ハンが僧侶出身の迷信で堅まつた頑迷固牢の野武士で、思想問題などには何等の理解をもたず、やゝもすれば地方地主と接近する傾向があつたので、ソウエート政府と提携してたつたペルシア共産黨員と相容れなかつた。そこで、ソウエート政府もやむなくクチク・ハンへの援助を打ち切り、その部下の中で最も左傾色彩の濃厚であつたエスカヌーラ・ハンと手を握り、新たに左傾的反英國及び反國王運動を起した。しかしその結果、クチク・ハンもエスカヌーラ・ハンも、共倒れとなつて、前者は殺害され、後者はロシアに逃れ、一九二一年十一月ギラン共和國は、つひにテールラン政府軍のために平定された。

しかし、その頃、

×	×	×	×	×
---	---	---	---	---

、タヴリーズ、ボラサン、マサンドラン、ケルマンシヤフ等の各地にも叛亂鋒起し、ペルシアは殆んど國を擧げて、混乱状態にあつた。而して一九二一年の二月には、首府テールランにもクーデターが行はれた。

一九二一年二月二十日、カズウイン市駐屯のペルシア・コザック兵が、突然南下して、テールランに入り、諸官衙を占領し、王宮を包圍し、政府の閣員を始め、約二百名の高官及び貴族を逮捕して、これにコザック軍費支辨のために、巨額の税金を課し、二十五日、國王をしてセイド・ジーア・エツヂンを内閣總理に任命するの勅令を宣布せしめた。

但し、一九二一年の「テールラン政變」は、最初不思議にも、ロシアの手でなく、英國の煽動によつて行はれたものであつた。それは英國が一方、保守派のペルシア政府が遠巡躊躇して一九一九年の條約を批准せぬを憤慨し、他方ロシアが巧みに革命運動

を操縦して反英熱を煽ふるに手占摺つた揚句、自ら革命運動を後援して、この運動の指導権をロシアの手から奪ひ、保守派の政府を倒して、別に新政府を樹立し、同政府をして新たに、一九一九年の條約を實行せしめんことを期したのである。

× × × × × × × × × ×

しかし、「テーラン政變」によつて成立した新政府の宣言を見るに、「土地を農民に與へる」とか、「製造品に對する労働者の権利を承認する」など、全く社會革命の根本原則を標榜し、また、對外政策に於ては、治外法權の撤廢、英波條約の破棄、ソウエート・ロシアとの提携など、ボリシエウイキーの政策その儘を提唱し、また幾多の貴族を逮捕するなど、徹頭徹尾赤化革命に終らんとした。しかも、この革命が英國の後援によつて行はれ、革命政府の總理に親英新聞バージ社の主筆セイド・ヂーア・エツヂンが擧げられたのは頗る不可解なことであつた。或はこの政變の裏面にはロシアの「赤い手」も加はつて居たかも知れぬ。少くとも政變の結果から推せば、ロシアの手か

ら、革命運動の指導権を奪はうとして試みた英國の計畫が、中途にして、却つてロシアのために利用されたと見なければならぬ。

但し、セイド・ヂーア・エツヂンの新政府は、間もなく、貴族及び地主階級から猛烈なる攻撃をうけ、つひに政局を維持し切れず、總理自ら内閣を投げ出して、何處へかその姿をかくしててまつた。

一九二一年二月の「テーラン政變」によつてたつた新政府はかくして、三日天下に終つたが、同政變の直後、ホラサン縣にセイド・ヂーア・エツヂン派の憲兵士官マーメット・タギ・ハンの叛亂がおこつた。全亂が鎮定して半年たぬ中に、ラフツン・ハンの率ゆる軍隊が、タウリーズ市を占領して、獨立を宣言した。翌年二月八日、政府軍は、猛烈なる激戦の後、同市を奪還し、ラフツン・ハンはソウエート・アルメニアに逃げて、武装を解除された。

その他幾多小規模の動亂は、絶えず、諸方に頻出したが、その多くは、ロシア及び

英國を背後の勢力とする陰謀運動であつた。

由來ベルシアの政界は、既に久しい前から、ループルとポンドによつて墮落の底に落され、政治家には一定の主義主張なく、昨日の親英派は、今日の親露派にかわり今日の民主々義者は、明日の反動主義者となるやうな有様であつた。一方には軍閥とまでは言へないが、各地に獨立した武力團體があつて、各々ロシアもしくは英國の後援を楯に跋扈し、争亂のたえる間もなかつた。その有様は、全く、今日の支那を縮圖にしたやうな觀がある。たゞ、兩者の差は、ベルシアが英露二國だけの角逐舞台であるに反し、支那におけるロシアは、常に幾多の列強を對手とせねばならぬ點にある。

ある有力なるポリシエウイキーは、曾つて「支那におけるソウエート政策は、多くの點において、ベルシアにおける經驗を基礎としたものである」と語つたことがある。或は事實そうかも知れぬ。少くとも支那における學生や、左傾政客に對する巧妙なる操縦ぶりと、西北及び廣東軍閥に對する極めて用意周到なる援助ぶりには、たしかに

ベルシアにおける幾多の辛い經驗によつて、學んだ教訓が加はつてゐると見なければならぬ。

#### 四

ロシアのベルシアにおける活動に際して、事をともにせるは勿論主としてベルシア人間の左傾團體である。

ベルシアには、これまで幾度か、社會黨が組織された。しかしこれが牛耳を握れるものは、主としてテーランや、タウリーズの政治野心家で、彼等はたゞ社會黨を自家の政策に利用せんとするのみで、思想上の根底にたつものでなかつた。社會黨とは云つても何等綱領の確定したものがなく、黨員の出身も、いろ／＼の階級にわかれ従つてその結束頗る薄弱であつて、難局にぶつかる毎に瓦解するを常とした。

たゞ社會黨中の極左黨たるベルシア共產黨だけは、他の社會黨に比して、結束もかたく、組織も完全し、今もなほその存在をつゞけてゐる。

ベルシア共産黨の創立されたのは、一九一七年のロシア三月革命の直後のことであつた。當時コーカサスのバクー石油坑に働らいて居たベルシア移民の労働者が、アダレットと稱する政黨を組織した。これがそも／＼今日のベルシア共産黨の前身で、その黨綱は大體ポリシエウイズムの綱領を容れたものであつた。

ベルシア本國における半ば封建的の舊制度と、回教の迷信的弊風とは、常に國內産業の發達を阻害し、その結果、幾多の労働者は、露領に移住した。コーカサスやトルキスタンにおけるベルシア移民は、年々増加し、一九一八年には三十萬人の多きに達した。アダレット黨は、先づこれ等ベルシア移民の間に同志を募り、やがて黨員數六千を算するに至つた。

その後、露領を根據地として、徐ろにベルシア本國にも宣傳員を派遣し、宣傳文書をおくり、各地に黨綱を張り、内外呼應して、黨勢の伸張をはかつた。一九二〇年六月二十三日にはベルシアの北岸エンゼリー港で、ベルシア共産黨大會が開かれ、黨の幹

部を選擧し、ベルシア本國內においても、大いに積極的計劃をすゝめることゝなつた。しかし、黨員の多くは、革命運動に無經驗であつたのみならず、幹部に人材が少なかつたため、事業は遅々として進まなかつた。一九二一年クタク・ハンの叛亂利用策は前記の如く、失敗に終り、又同年のテラーン政變では、英國のために、革命運動の指導權を奪はれんとした。加ふるに、黨内左右兩派の内訌頻發して、統一を缺き、一時

リザ・ハンと



シユミナツキ

殆んど解黨の危機に瀕したこともある。

しかるに、一九二二年の春、モスクワの第三インターナショナルは、左右兩派に對し手厳しい戒飭を加へ、兩派をして強制的に妥協せしめ、漸やく黨員の統一を恢復することが出來た。爾來、アダレット黨の勢力は、俄かに伸張し、ロシアの後援によつて、ベルシア

の中央政界及び地方軍閥等、諸方面に、その「赤い手」をふりまわし、陰然たる勢力をなすに至つた。

かの英國外相カーゾン卿が、近東及び中東の形勢を極度に悲觀し、つひに一九二三年五月、ソウエート政府に向つて、最後通牒をつきつけ、テーラン駐在のソウエート大使シユミヤツキー及び、カプール駐在のソウエート大使ラスコリニコフの召還を要求するに至つたことは、最もよく當時のソウエート當局がこの方面に對して、如何に辛辣な手腕をふるつたかを證するものである。

## 五

しかし、一九二三年の末頃から、幾多の内亂に乗じて、身をおこしたリザ・ハンは、恰かもトルコにおけるケマル・パシアの如く、武力を以て、國內の統一をはかり有力なる國民軍を編制して、政治の實權を掌握した。リザ・ハンの對外政策は、先づ英國勢力の驅逐を眼目としたが、同時にロシアの極端なる「赤化」運動に對しても、か



リザ・ハン

なり、手強い制肘を加へた。しかし、ロシアも亦、産業發達の遅々たるベルシアにおいては、社會革命の強行を尙早となし、英國勢力の倒潰を當面の急務となすの見地から、リザ・ハンの政府にして、對英反抗策をとつて進む限り、この政府の勢力を阻害してまでも、「赤化」運動を強行すべきでないとなし、むしろ、リザ・ハンを援助して、英國に當らせる方針をとつた。

一九二四年、一時、英國の勢力が盛返へし、リザ・ハンは暫く隱退したことがあつたが、間もなく、再び内閣總理兼陸相となり、昨年私がテーランに往つた時には、ベルシアは全くリザ・ハンの獨裁專制のもとにあつて、國王の如きは、全く空位を擁してゐたに過ぎなかつた。たゞリザ・ハンは、トルコのケマル・パシヤとは違つて、一兵卒から成上りろく／＼文字も書けず、たゞ強い一方の豪傑であるだけに、思想上の素養がなく、最初は共和黨の如く見せたが、中途にして、帝制主義者に豹變し、昨年

末つひに、テラランのクーデターによつてカヂヤール王朝を倒し、自ら王位についた。帝制にかへるに、同じく帝制を以てするが如き革命はもとよりソウエート・ロシアの喜ばざるところであつたに相違ない。しかし、モスクワ政府は王位につけるリザ・ハンに對しても、何等敵意をさしはさまず、寧ろその成功に祝賀の意を表したやうな譯で、この點から見てもソウエート政府當面の政策が、ペルシアにおいて、何よりも先きに「強き政府」が建設され、以て英國の侵畧政策に對抗し、民族の獨立を完成せんことを眼目としてゐるものであることが明白に察知し得られる。即ちペルシアも亦ソウエート政府が「民族解放」と「英國反對」の標榜においては、軍閥とでも、はた又國王とでも、握手を辭せないものであることの實證の一つとなつた譯である。

但し、さらばとて、ソウエート・ロシアが、ペルシア「赤化」の計劃を全然拋棄したと斷定してしまふも亦、早やまつた觀察とせねばならぬ。たゞ、ロシアは、この際積極的にペルシアの本國にふみ込んで、「赤化」革命を強行しやうとの作戰をすてた

ゞけで、その代り、ソウエート領内におけるペルシア移民の間には、益々アダレット黨の勢力伸長につとめてゐる。これは即ち、先づ露領内におけるペルシア労働者間にソウエチズムの「手本」をつくり、以て徐ろにペルシア本國人をして、この手本にならしめんとする所謂「實物宣傳」の方針に移つたもの、換言すれば、ペルシア革命の「強襲作戦」から、ペルシア「赤化の正攻法」に移つたものと見るべきであらう。

## 六

私は、昨年訪露の機會において、五月十四日モスクワを發し、南路各地方及び、アゼルバイジャン、ジョルジア、アルメニア等のコーカサス・ソウエート聯邦を歴遊し、更らにカスピアン海をこえてペルシアを訪うた。當時の旅行記は、八月十四日付テラン發電で、大阪毎日新聞に通信した。全通信の大要は左の如くで、ペルシアの現状を最も簡潔に記述したものと思ふ。

× × × × × × × ×



五月十八日、私はバクーで、乗船し月明をあびながら、湖水の如く静かなカスピアン海をわたつた。あくれば十九日の早朝、水平線上に、低く平らかなペルシアの北岸が見える……

私たちの汽船はエンゼリ港に着いた。こゝで私は、同船のペルシア外交官フアルザネ（前マドリッド駐在大使）とともに、自働車を驅つて首都テーランに向つた。……私は先づ沿道の兩側諸處に稻田が開け、赤い腰巻をして、田植をしてゐる田舎娘や、藁屋根の農家を發見して、たえがたい感興に打たれた。私は道づれのフアルザネを顧みて「こんな中部アジアで日本村を發見しやうとは夢想だもしなかつた」といへば、フア氏は、ほゝえみながら「昨年日本の使節一行が、米の出来るペルシア國を米を荷車につばい積んで旅行した……と云ふ皮肉な珍談がある」と語る。上陸して三日目に私達の乗れる自働車は、イラン山背に上りさらに進んで山脈の南方に出づれば、四圍の風光は急に變つて廣漠たる陰鬱な草原となつた。それは日本村を過ぎて、蒙古

の草原に入つた感がある、この旅行中、到る處で不愉快に感じたことが二つあつた。一つは各驛で軍隊の警戒がはげしく、旅行者は驛毎に通行券の提示を迫られたこと（ペルシアは、最近二年間ブツ通し、政局不安定のために、戒嚴令下におかれてゐるのである）も一つは沿道到るところ乞食の襲撃をうけたことである。

かくて、私は三晝夜の自働車旅行の後、テーランに到着した。（中略）

私のテーランに来て、最も不愉快な印象に打たれたのは、「婦人顔被」の風俗である。即ち婦人は、外出する時、必らずチャルダと稱する黒い袋のやうな外套をまとひ、面部には黒網を覆ふて見えないやうにしてゐる。まるで大きな鳥の怪物のやうである。ペルシアの都に来て、つひにペルシアの婦人を見ることが出来ないのである……ペルシア婦人は數世紀にわたつて宗教の犠牲となつてゐる。彼等は十二三歳になれば結婚し、結婚後は、夫の外は男子に面を見せることを禁せられて居る。又父でも、兄弟でも、また息子でも、馬車に同乗することを許されない。宗教は、

婦人の教育を罪惡であると説いてゐる。始めて女子の學校入學を許されたのは、僅か三年前のこと、婦人の多くはあきめくらである。ペルシアは、回教の迷信が完全とその勢力を維持してゐる最後の國、唯一の國である。他の回教國では、アフガニスタンですら、婦人のチャルダは、已に二三年前、廢止されたと云ふに、ペルシアのみは、今日猶ほこの陰鬱なる慣習から脱し得ないのである。尤も最近、市中でチャルダを着けない若い婦人と、宗教團體との間に小ゼリ合ひがあつたといふ話もあるが、ペルシアの婦人運動はまだ一足ふみだしたに過ぎない。

私はある日ペルシア國會議長モンチノル・モルクを訪問し、「ペルシア婦人は一般公衆生活に參與してゐない。之れは國家のため非常な損失であらう。貴國當局は何故この舊習慣を改良しないか」とたづねたところ、モ氏は「國會議員の多數はすつと以前から婦人解放の急務たることを承知して居る。しかし今直ちにこれを決行することは殆んど不可能である。かりに、今日國會がチャルダを廢する法律を出したとせんか

明日我等は必らず高僧達の手で煽動された狂信的群衆によつて慘殺されるであらう」と答へた。有力な國會議長すら宗教迷信の狂暴を怖るゝことかくの如くである。去年の夏、米國領事が回々教會堂の「神聖なる噴水」の寫眞を撮つたために私刑されたことがある。

ペルシアは久しく英露角逐の舞台であつた。しかし、ロシア革命以來、この形勢はがらりと一變した。ロシアとペルシアとの關係の、親密を加へるに伴うて、ペルシアにおける英國の勢力は、下り坂に傾いた。ペルシアの獨立を根本から覆へさんとした一九一九年の英波條約はつひに批准されない。英國は或は反動派を使嚇し、或は革命派を練つて、同條約の遂行をあせつて見たが、策を弄すれば弄するほど、ペルシア國民の反感を買ひ、その親露傾向を促すのみであつた。ペルシア政府は英國の勢力を抑制するために、ロシアの力によつたのみならず、米國にもよらんとし、米國から財政顧問十數名を招聘した。しかし私があるペルシア官吏に米國顧問の成

續如何をたづねたところ、同官吏は響登して「米國顧問が來てから、もう三年になる。しかもペルシアの財政はすこしも改善されない。われ等官吏は、俸給の支拂を受けざること、已に三ヶ月分に及んでゐる……」と語つた。

ペルシアの今日は、前記の如く、久しい間、外、列強の壓迫と、内、宗教上の狂信弊風の下にその發達を阻害されたため、頗る貧弱な經濟状態にある。ペルシアは天然の資源に富んでゐる。然るにその開拓は多く英國人の手にある。たとへば、その豊富な石油坑の如き、英波會社の租借に委し、首府テラーンは今もなほ、ロシアから石油を輸入してゐるやうな始末である。

× × × × × ×

私はある日テラーン市のバザーを見物して一驚を喫した。いづれの國を旅行しても、かくの如く大きな不思議なバザーを見たことがない、このバザーには、多くのアーチや、通路や、門や、隊商宿があつて、數千の店舗が無數の商品をならべてゐ

る。私は一度このバザーに入り、出口が判らなくなつて、長時間まごつた。最も目をひいた商品は、奇麗な模様を施した毛氈である。

諸處の店頭、日本品もちよい／＼目につく。富士山を描いた屏風や、菊の模様の陶器硝子器やマッチ類があつた。統計の示すところによれば、昨年日本よりの輸入は百萬圓に達し、日本への輸出は百萬圓を少し超過してゐる。しかしペルシアには日本商人は一人もおらない。日本との貿易は悉くペルシア人若しくは第三國の商人の手によつて行はれてゐる。

ペルシアは農産物に富み、礦物資源が豊富であるが、工業は一向發達してゐない。さればペルシアは製産品の市場として、頗る有望と見るべく、日本が中部アジアの市場を輕視してゐることは、大なる誤りであつて、日本はこの地において通商上「小友那」を容易に發見し得るであらう。

バザーの一隅で、私は「銀器の山」を見た。フォーク、ナイフ、匙、サモワール、

コーヒー沸し、煙草入れ、ポトマナー等の銀器が山の如く積んである。そばによつて見ると、悉くロシア製である。あとでペルシア人に聞いて見たところ、曰くあれは、ソウエート大使ロトシテインがロシアから持つて来て、宣傳費のかわりにバラまいたものだ！……」

## 八 アフガニスタンの對英奮闘

「印度の門戸」・英國のアフガニスタン侵畧・露ア條約・エ  
ンウエル・バシヤの反ソウエート運動・カーゾン卿の最後  
通牒・近東及び中東三國に對するソウエート政策の比較・  
三國大使との談話

アフガニスタンも亦、ペルシアと同じく、久しく、英露勢力の競争舞台であつた。たゞアフガニスタンに對するロシアの政策は、ペルシアにおけるそれに比して、概して消極的であつた。十九世紀末から二十世紀始めにかけて、トルキスタン總督や、カブール駐在ロシア公使など出先きの當局が、自己の功名心から、屢々アフガニスタンの親露派を煽動し、かなり急激なる反英運動をおこさせたこともあつた。しかし、ロシア中央政府は、概して、アフガニスタンに於ては、常に一步を英國に譲り、たとひ反英運動が烽起しても、愈々印度軍と干戈を交へる段になると、俄かにこれが援助の約束を反古にして、逃げをはつたものである。一八六九年には、時の外相ゴルチャコフ公は「露國政府は、アフガニスタンを以て、英國の勢力圏外にあるものと認む」との宣言を發した。これは云ふまでもなく露國がアフガニスタンを以て、英國の勢力圏と認められたものである。

× × × × × ×

露國の消極政策に反して、英國のアフガニスタン對策は、あくまで積極的であつた。アフガニスタンは、印度と接壤の國であつて、「印度の門戸」とも云はれ、英國は印度防備のためからしても、斷じてこれをロシアの手に渡すことが出来なかつた。否な、英國の印度當局年來の宿志はむしろアフガニスタンを征服し、これを併合して、以てロシアの勢力をトルキスタンの奥におしこめんとするにあつた。しかしこれには、ロシアの勢力の外に、も一つ、アフガニスタン國民自身の反抗があつて、流星の英國もつひにその宿志を果すことが出来なかつた。

二

英國はこれまで三度び印度からアフガニスタンの侵畧を試みた。第一回は、一八四二年、第二回が、一八七九年から一八八〇年、第三回は、一九一八年で、三回とも、一勝一敗、最後には英國が勝つたけれども、勝つまでの英國の犠牲は頗る莫大なるも

のであつた。殊に一八七九年の戦争には、ロバート元師の率ゐた二萬人の部隊が全滅し、戦費二千萬ポンドを要したと云ふ。

× × × × × × ×

由來アフガニスタンは、地勢が山地で天然の險要たるのみならず、アフガニスタン人は極めて慍悍なる國民で、男子は殆んど悉く武装し、幼時から山地の戦闘に慣れてゐる。加ふるに、祖先代々から、英國に對する敵愾心が遺傳的に國民の血をわかつてゐる。英國は三度戦争を重ねて、つひにこの國を印度に併合することが出来なかつた。

一九〇七年、英露が中東一帯における協商をなすに當り、ペルシアは、之れを南北に兩斷して、英露各々半分づゝ、自己の勢力範圍に入れたが、アフガニスタンに關する條約に於ては、露國政府は、前記ゴルチャコフ公の宣言によつて「アフガニスタンとの國際交渉は一切英國の手を介すること」及び「露國は、アフガニスタンに外交官を派遣せざること」を約定し、アフガニスタンから手を引いた。

爾來、一九一八年に至るまでのアフガニスタンは、全く英國の屬領状態にあつた。

その間、終始、親英政策をとつてゐたハビブラ國王の如き、印度總督の前に、平身低頭、たゞその願使するがまゝに動いた。而して世界大戦争が起り、植民地における英國の勢力頓みに衰頹し、印度の革命運動が、そろ／＼火の手をあげ、アフガニスタンにとつて、對英反抗の絶好機會が展開するに至つても、ハビブラ王在位中のアフガニスタンはつひに頭をもたげることが出来ず、カブール政府は依然として、終始英國に媚び、印度總督の傀儡となつてゐた。

### 三

かくするうちに、ロシア大革命が起り、ソウェイト政府の宣傳は、トルキスタンを越へて、アフガニスタンにも浸漸して來た。一九一九年の春、北部アフガニスタンの親露黨は、ソウェイト政府の援助によつて、革命の陰謀を企て、つひにカブールにおいて、クーデターを行ひ、ハビブラ王を殺害し、その子のアマヌラ・ハンを擧げて王位につけた。

若き新王は、即位と同時に、レーニンに祝電をおくり、露ア國交の恢復を提議した。これは恐らく、レーニンが外國の國王からうけた最初の祝電であつたらう。

然し、カプールのクーデターが帝制に代うるに同じ帝制を以てしたのは、レーニン等にとつてあきたらぬところであつたに相違ない。たゞし、今日のアフガニスタンでは社會革命の強行は到底不可能のことであり、又それはレーニンの當初から志したところでなく、目指すところは、アフガニスタンの民族解放と、印度における英國の勢力覆滅にある。この二大目的のためには、レーニンは、アフガニスタンの國王とも手を握るを辭せなかつた。アマヌラ・ハン王の祝電に接するや、ソウエート政府は、得たりかしこしと、卒先アフガニスタンの獨立を承認し、アフガニスタンも亦、メーメツド・ワリー・ハンを全權特使として、モスクワに派遣した。

特使のソウエート領内に入るや、國境驛のクシカからモスクワに至る沿道、到る處熱烈なる歓迎をうけ、モスクワではクリムリン宮で、レーニンの懇切なる歡待をう

けた。

メーメツド・ワリー・ハンは、モスクワで、露ア條約締結の豫備交渉を遂げて、一九二〇年の春、カプールに歸つて行つたが、恰度その頃私は、モスクワに入り、恰かも、アフガニスタン特使がつひ數日前まで泊つてゐたと云ふ宿舍に投じたのであつた。

その後、ソウエート政府は、十月革命に際し、バルチツク艦隊を率ゐて大ひに活躍したラスコリニコフを援擢し、全權大使にあげ、アフガニスタンに特派した。ラ大使は、カプールにおいて、露ア條約を締結し、同條約は、一九二二年二月二十一日露農政府、全年八月十四日アフガニスタン國王によつて批准された。

#### 四

かくして露ア兩國の國交は、ソウエート革命勿々極めて親善なる關係に入つた。たゞ一九二一年來、トルキスタンのブハラで、エンウエル・バシヤの率ゆる反ソウエート

運動の突發に會し、兩國の關係は一時中斷の状態に陥つた。

エンウエル・バシヤの聲名は、かねて回教民族間に普ねく知られ、殆んど神秘的の英雄として崇拜されてゐた。従つて彼が一度兵をブハラに擧ぐるとの報道の傳はるや、中央アジアから、中東一帯にかけての回教民族は擧つて狂喜し、その成功を祈つた。當時、エンウエル・バシヤはトルキスタンから、印度に進出し、印度獨立軍を指揮するであらうとの説が傳はり、彼の聲望は、アフガニスタンでも隆々たる勢であつた。こゝにおいて、アフガニスタン政府の内部でも、エンウエル・バシヤの援助を主張するものがあり、これがため、漸やく順調に接近し來つた露ア關係は、俄然惡化し、英國はこの機に乗じて、再びカブールにおけるその勢力をもりかへさんとした。

然るに翌一九二二年、ソウエール政府は、赤色軍をトルキスタンに集中し、ブハラ攻撃を開始するや、さすがのエンウエル・バシヤも衆寡敵せず、全年八月十八日の激戦で、一敗地に塗れ、バシヤ自ら悲壯の戦死を遂げた。こゝにおいて、アフガニス

タンの對露輿論は再びもとの親露傾向に戻らざるを得なかつた。蓋しエウエル・バシヤを崇拜した回教民は、バシヤの軍を破つた赤色軍の武力に對して、猶ほ更ら驚歎せざるを得なかつたのである。

かくして、カブールの政局は再び親露派の天下となり、一時、頭を擡げんとした親英派は、いつの間にか影をひそめ、さきに特使としてモスクワに派遣されたメーメツド・ワリー・ハンが外務大臣に任せられた。

## 五

全年から一九二三年にかけ、露國のアフガニスタンにおける勢力は、日を逐ふて増大し、英國は、十九世紀から二十世紀の初めにかけて三大戦争を経て扶殖した勢力の殆んど凡べてを根本から失ふことゝなつた。のみならず、露國のアフガニスタンにおける勢力の伸張は、やがてその隣りの印度にも及ばんとし、英國は非常の脅威を感じたこゝにおいて印度當局はカブール政界の要路者に向つて、或は賄賂を使ひ、或は威嚇



を用ひ、百方露國の勢力驅逐につとめたが、何等の効果がなく、アフガニスタンの當局者は明らかに「ロシアの第三インターナショナル（コムインテルン）よりも、英國のインペリアルイズムの方が東方諸國にとつて、より危険である」とのかたい信念を擧げなかつた。

一九二三年に至つて英國政府は、この刻々迫る「赤化」の險惡な形勢を坐視することが出来ず、今年五月、つひに勞農政府に向つて、最後通牒を發し、ラスコリニコフ大使の召還を求め、次いで今年十二月アフガニスタンに向つても、全じく最後通牒を突きつけ、大々の威嚇を試みた。しかし、この最後通牒は二つとも、一向その手ごたへがなく、英國は結局アフガニスタンにおける現在のソウエート勢力を認める外なかつた。

一九二四年以降のカーブル政府は、大體において、ロシアの勢力を利用して英國の勢力を牽制し、以てアフガニスタンの獨立を確保する方針に進みつゝある。

アフガニスタンは、最初から、半ば封建制度の王國であり、且つ、國民は剝悍なる好

戰民族で、しかも經濟的には殆んど半開國状態にあつて、經濟革命は到底成功の見込みがない。

ソウエート政府の對ア策は、徹頭徹尾、アフガニスタンを以て印度革命の策源地となすの唯一の目的に向つて猛進するにあつた。社會革命を目的とする「赤化」運動は殆んどこれを行はなかつたらしい。従つて露ア國交はエンウエル・バシアの旗あげ當時の外は、僅かに國境問題で二三度紛争をおこしたゞけで、頗る圓滿に進行し、「英國勢力の覆滅」てふ共同の目的に向つては、常に一致の行動に出でんとする傾向をもつてある。

本年八月、露ア兩國間に、恰度、露土間におけると同様の「保障條約」が締結された。これは云ふまでもなく、英國の中東外交に對する大打撃である。

## 六

かくして、トルコ、ペルシア及びアフガニスタン三國に對するソウエート・ロシア

の政策を比較對照するに、その間、國情の相異によつて多少手加減の差こそあれ、體左記の點において、同一方針をとつて來たものと云へる。

- 一、その主要目的は民族の獨立を助け、以て英國の勢力を驅逐するにあつた。
- 二、共產革命は強いてこれを強行しやうとしなかつた。
- 三、たとひ、時折「赤化」運動を起したにしても、それは矢張り民族獨立と英國反對の根本目的に向つて進み、敢てこれを社會革命へこぎつけやうとはしなかつた。
- 四、否な、むしろ、この運動がその國の政府の反英政策を妨害するやうな場合は、直ちに自らその手を引くを辭せなかつた。
- 五、従つて、鞏固なる政府が確立し、同政府が明らかに反英政策をとり、且つこの政策を斷行する能力があるものと認められた時は、つとめてこの政府と親交を結び、その政策の實行を扶ける方針をとつた。而して
- 六、これ等の新政府は、必らずしも左傾的色彩の政府たるべきを固執せず、共和政府

であらうと、帝制政府であらうと、何等選ぶところが無い。

即ち、トルコにおいてはケマル・パシアの國民政府、ペルシアにおいては、リザ・ハン政府、アフガニスタンにおいてはアマヌラ王に對して、終始親善方針をとり、その民族獨立の完成と、反英政策を援助し、無暗にその國の共產黨を煽動して、「赤化」革命を強行しやうとはしない。然し、これを以て直ちに三國における社會革命を斷念したと見るべきでなく、たゞその本國にふみこんで、積極的にこれを強行しやうとせぬだけで、その代り露領内における回教民の間には、文化の向上をはかり、ソウエチズムの徹底につとめ、以て徐ろにこれを隣國の同種族に及ぼさんとしてゐる。

## 七

私は一昨年春の訪露に際し、モスクワでトルコ。ペルシヤ及びアフガニスタンの三大使を歴訪し、親しく三國の現状と、その露國との關係について語つた。即ち當時大阪毎日新聞に寄せた三國大使と私の談話は左の如くである。



アフガニスタン大使  
アフガニスタン

アシルバ大使  
クレマ・リウヤシメ

コルト大使  
イ・ルタフム

アフガニスタン駐露大使ガツシム・ハンは同年三月五日、アフガニスタン獨立第六週年紀念日に親任狀をソウエート聯邦中央執行委員長カリニニ捧呈したので、私は先づそれについて祝辭をのべた。ガツシム大使はこれに對し「日本人たる貴下の祝辭に接したるは、殊更ら余の欣喜にたえないところである」と答へ、アフガニスタンの近況について左の如く語つた。

過去六年間、アフガニスタン政府は、内政改革や、近隣諸邦並びに歐洲諸國との交外關係恢復のため、忙殺されてゐたが、ソウエート・ロ



シアとは、已に一九一八年において、相互にその獨立を承認し、最も親善なる關係にある。英國とは近く通商條約を締結することになつてゐるが、全國とは、印度の國境問題について紛擾頻出し、又印度經由の武器輸入問題も、果して英國がこれに承認を與へたかどうか、余のカブール出發頃までには、まだ解決に至らなかつた。日本との國交開始問題の始めて、わが當局者間に議せられたのは、今より四年前のことであるが、未だ實現するに至らないのは遺憾至極である。アフガニスタンの輿論は、日本大使館の一日も早くカブールに開設されんことを切望してゐる。アフガニスタンでは、日本に關し日露戰爭と、最近數十年間における日本の進歩を論せる書籍が、一般識者間に廣く愛讀されてゐる。各學校では「われ等アフガニスタン人も、かく短時日間に、大發展を遂げた日本に見習はねばならぬ」と教へてゐる。余は過般日本の大震災に對して滿腔の同情を披瀝するものである。願はくば貴國民に對し「受難は經驗なり」との回教の箴言を傳へられんことを。

◇ ◇ ◇  
 ペルシア代理大使モファ・ヘル曰く

ペルシアは最近まで英露兩國帝國主義の競争場であつた。兩國の競争のいよく激しく、兩國のペルシアに對する壓迫の手の加ふるに従つて、ペルシアの國情は益々危態に瀕した。

然るに革命の直後、勞農政府が斷然その舊來の政策を一變したので、兩國の競争は俄かに弛緩した。過般、英國は南ペルシアにあるその最後の駐屯軍を撤退し、今や米國の財政顧問數名を除いて、外國の顧問、教官、軍隊は一人もゐなくなつた。

二十年前、日本商人が首府テーランを訪ふて以來、日波兩國の關係は絶えてゐたが、最近、六人の日本官吏（縫田總領事一行）がテーランを訪ひ、ペルシア官民は大いにこれを歓迎した。三年前、ペルシアは支那と修交條約を締結した。當時、テーランの諸新聞は、何故日本とも修交關係に入らないかとて政府を促したことが

ある。

露國とペルシアとは、一九二一年國交を結んで以來、最も親善なる關係にあることの一、二ヶ月内に通商條約を締結することになつてゐる。

◇ ◇ ◇

駐露トルコ大使ムフタル・ベイは、私が「ケマル・パシヤの聲名は内外に噴々としてゐる。パシヤの民心を收攬せるは、武斷専制家としてか、或は又一定の主義思想のリーダーとしてか」と質問したのに對して、答へて曰く

土國は希土戰爭以來、特にセーヴル條約締結の後、祖國に居住する權利さへも剝奪され、國民は擧つて、救國の偉人の出現を待つてゐた。恰かもこの時にあたつてトルコの國權擁護の急先鋒としてたつたのがケマル・パシヤである。衆望は期せずしてパシヤに集つた。ケマル・パシヤは數年間の力戰奮闘の後、失はれた領土を恢復し、國家を再建し、都をアンゴラに定めた。けだし武装を解除した君府は、外國

に犯されやすきに對して、アンゴラはトルコの中央に位し、且つ軍事的にも頗る要害の地であるからであつた。

露國とは既に一九二一年において修交條約を締結してゐるが、通商條約締結の交渉は目下進行中で、おそくとも數ヶ月内には締結を見るであらう。但し實際の通商は既に夙に開始され、露國通商委員は最近トルコに派遣された。

英國とはモスール油田問題で爭議をつゞけ、容易に折り合はない。日本との國交開始は、われ等の多年來切望してゐるところ、一九一〇年余が維牙納駐在代理大使であつた頃、全地駐在の日本大使と土日修交條約締結について交渉したことがあるしかし、當時日本がトルコ國民の最も苦痛とする治外法權の撤廢を肯んせなかつたために、日土の國交恢復を見るに至らなかつたのは、頗る遺憾の極みである。

次いで私はトルコ急進派機關紙の「ケマル・パシヤが最近の國會で改革を宣言して以來、トルコは東方民族より漸次西歐民族に移り變らんとしてゐる」との社説をひい

てムフタル・ベイの意見をたゞいたところ、氏は曰く、

文化の點ではトルコ人は、歐化に傾いて來たが、その精神においては依然、骨髄まで東洋人たるの資格を失はない。そしてわれ等は東洋人たることを誇りとするものである。

わかれに臨み私はム氏の手を握りながら、「日本がヴェルサイユ會議において人種平等案を提議した時、これを支持するものはなかつた。將來、日本が重ねてこの問題を提げて起つとき、再び孤立無援の窮境に陥るであらうか。」と質問したところ、ムフタル・ベイは曰く、

次ぎの會議においては、日本の人種平等案は必らず、トルコ、露國、ペルシア、アフガニスタン等から力強い援助をうけるであらう……。

## 九 失敗に終れる印度革命

レーニンと印度革命・革命可能の理由・革命失敗の原因・

ガンディーズムとレーニニズムとの抵觸・マクドナルド内閣

の印度政策・強襲作戦より「赤化正攻法」へ・近東及び中

東より極東への方向轉換

一九二〇年の春、モスクワで出會つた印度革命黨員の一人は、私にこんな話をしたことがある。

レーニンは、今、ポーランドを衝いてドイツに出で、中央ヨーロッパの赤化によつて世界革命の火の手をあげやうと計畫してゐる。しかし、萬一それが失敗に終つた場合、彼は、鋒を轉じて中央アジアからアフガニスタンに出で、印度に進出してアジア革命を決行するであらう……

同年五月、私がモスクワに居る間に、ソウエト政府は、果してポーランドに對して、宣戦を布告し、トロツキーの率ゆる赤色軍は、長驅ポーランドに侵入した。當時南露のデニキン軍を破つた勢で士氣旺盛を極めた赤色軍は「世界革命」の夢にあこがれ、遮二無二猛進した。八月には、いまひと息で、ワルソーを乗取らんとする勢であつた。しかし、當時、ポーランドを極力援助してゐたフランスは、この形勢を見て、

ポーランド救援の作戦を立て、ウエーガン將軍を急派して、敗退せるポーランド軍を立て直した。全年秋、ワルソー城外の激戦でポーランド軍は、猛然逆襲に轉じ敵の中央を突破し、赤色軍をして潰亂敗走せしめた。

レーニンの所謂「ポーランドを通じてのヨーロッパ革命」は、本著の冒頭にも記述した通り、つひに見苦しい失敗に終つた。

しからは、レーニンの第二の計畫、即ち印度革命はどうなつたか。

## 二

レーニンの著書の一節に曰く、

「印度に於ける革命運動は、一方、工業労働者の數を増すにつれ、他方、英國官憲の印度人壓迫の加はるにつれて、益々その火の手を揚げるであらう」

これは、全く、レーニンが私に向つて「西洋の列強は東洋の植民地において、自ら已れを埋める穴を掘つてゐる」と語つたのと異句同意であつて、英國が印度に資本を

投じ、工業の勃興を促すは、労働者階級の勢力を増進するもの、英國の壓制暴虐を遠しうするは、是等、労働階級間に革命熱を煽ふるもの、即ち換言すれば、所謂「英國は印度において自らその本國を埋める穴を掘りつゝある」のである。

× × × × ×

レーニンは、東洋諸國中、印度において、最もたやすく革命の成功すべきを信じてゐた。それには幾多の理由があつた。即ち

第一、印度は實に東洋被壓制民族の中で唯一の工業國である。現に工場數八千、労働者八百五十萬人に達してゐる。

第二、印度の社會状態は、都會の一部分に於て工業の著しく發達せるにも係らず、地方の殆んど全體は、今尙ほ、時代遅れの封建状態にある。現状不滿の空氣は全國に満ちてゐる。

第三、印度人三億五千萬人の上に、僅か十五萬人の英國人が支配權を握つてゐる。

その結果、國民の反英熱は益々昂まり、民族解放運動は日々に勃興しつつある。

斯くの如き状態にあるから、一度印度に革命の火をつければ、直ちに、三億五千萬の印度人が起つて、十五萬の英國人を追拂ひ、そこに東洋革命の根據地が築かれ、更に、所謂「英國を埋める穴」が堀られるであらう……。少くとも、レーニンは、しかく確信して印度革命の劃策に腐心した。

### 三

レーニンは、一九一七年の革命の當初來、頻りに印度革命の志士をモスクワに招きよせ、常に彼等との接觸連絡につとめた。同時に、印政侵入の第一歩として、先づトルキスタンの赤化に多大の努力を傾倒し、次いで、更らにアフガニスタンにおいて印度革命の前哨地をつくらんとした。

爾來、數年間、露國は印度革命のために慘憺たる苦辛をなめ、又幾多かくれたる犠牲を投じた。しかし、今日までの成績から推して之れを見るに、既往の苦辛と犠牲と

は、大半水泡に歸したと云はなければならぬ。

レーニンの極めて容易に遂行し得べしと信じてゐた印度革命は、意外に困難であつた。凡べての計劃は豫期に外れ、障害百出、つひにさすがのレーニンも「印度革命の強襲」の到底不可能なることを自認せざるを得なかつた。而して印度革命の失敗に終れる原因は幾多ある。即ち

第一、英國の印度統治策は、實に用意周到、老練熟達を極め、或は、回教民をして佛教徒と争はせ、或は、貴族階級を操縦して農民を壓迫し、僅か十五萬の英國人もつて、常によく三億五千萬の印度人を支配し、容易に革命遂行の餘地なからしめてゐる。

トルコ。ペルシア及びアフガニスタンでは、一步露國に譲つたが、印度に對しては遂に一指をだも染めさせない……とは、實に英國當局のかたい決心であつた。

第二、レーニンの最も大なる期待をおいてゐた印度のプロレタリア階級は、その數



こそ多いが、多くは無教育で、階級意識がなく、且つ労働者間の團體組織が幼稚で、政治的訓練がなく、たま／＼同盟罷工を企て、も容易に積極的 direct 行動に出でない。多くの場合、いつの間にか懐柔され、軟化してしまふ。

第三、印度赤化革命の最大障碍はガンヂーズムであつた。ガンヂーは、歐洲大戦争の終り頃から一九二〇年にかけて、反英大運動を起し、印度は殆んど國を擧げて反英運動の渦亂の巷となり、一時、英國の印度に於ける支配権力は非常の危殆に瀕した。

然るにガンヂーは、所謂トルストイ流の不抵抗主義者であつて、その反英運動も、その直接行動をボイコットに局限し、武力を以て英國と戦ふことを敢てしなかつた。従つて労働者や農民が反英熱に激せられて、愈々暴力に訴へんとする肝腎の時に、却つて運動の指揮者が不抵抗主義によつて、これを阻止し、その鋒先きを鈍ぶらせた。かくして歐洲戦争の直後から一九二〇年にかけての印度各地の大反英運動は、悉く中途にして挫折してしまつた。

ガンヂーの不抵抗主義は、ボリシエウイズムの極端なる戰闘主義とは遂ひに相容れなかつた。また、ガンヂーは常に農民にのみ重きをおいて、工業労働者を疎んじた如きもボリシエウイズムの戦畧と相反する所であつた。

#### 四

加ふるに革命當初の英國政府には、カーゾン卿の如き、嘗つて印度總督であつたこともある有数の東洋通が外務大臣の椅子にあり、常にソウエート政府の赤化運動に對して、警戒の眼を光らせ、いよ／＼「赤化」運動のベルシア及びアフガニスタンに侵漸して、印度の境邊危ふしと見るや、一九二三年五月、敢然勞農政府に向つて、最後通牒をつきつけ、カブールに於ける勞農大使ラスコリニコフ、テラーランに於ける勞農大使シユミヤツキーの召還を要求し、露國の印度侵入の鼻先きを挫いた。

更らに、露國をしてインド策に失敗せしめたのは、皮肉にも英國の勞働黨領袖マクドナルドの内閣であつた。保守黨内閣が倒れ、始めてマクドナルドの勞働黨内閣が組

續された時、露國では、今度こそ英國の印度政策が軟化するであらうと期待してゐたのである。然るに印度に對する労働黨内閣は、全然、保守黨内閣の政策をそのまま、踏



イロ・トナ・ラドベナマ

襲し印度の革命運動に對して、飽迄で高壓政策をとり、幾多印度の有力なる共産黨員を逮捕した。第三インターナショナルにおいて、印度共産黨を代表して、その幹部の一人たるロイに對しても、マクドナルド政府は、逮捕令を出し、

共産黨に對してはむしろ、保守黨や自由黨内閣よりも、却つて更らにより手強き高壓政策をとつた。

## 五

斯くて、レーニンの印度革命計劃は、全くその最初の豫期に反し、思ひがけない幾多の大きな障壁にぶつかり、つひに失敗に終つた。しかし、ソウエート政府は、これがため、印度革命の宿志を斷念したであらうか、否な、ソウエート政府は、決して「英本國の革命に向ふ途は印度を通じてゐる」とのレーニンの遺訓を忘れない。ポリシエウイキーは今もなほ被壓制民族中、比較的徹底した「赤化」革命を行ひ得るは、たゞ比較的工業の發達せる印度あるのみ、又英國に對する所謂「背面攻撃」として印度ほど有効な攻撃點はないと信じてゐる。たゞ、相手が英國である。輕々しく手を出すべきでない。強襲革命は不可能である。即ち「赤化正攻法」による外ない。ソウエート政府はかくして一方、印度國內に於て職業組合運動を繰縦し、労働者の團體組織及びその指導者の養成に努力すると同時に、他方中央アジアに於て、回教民族間におけるソウエート制度の建設と、民族文化の向上をはかり、印度國民に對する所謂「實物宣傳」につとめ、手間はとるが、確實なる手段で印度革命の機運をつくらんとしてゐる。

る。昨年トルキスタンにおいて、ウズベック及びトルコマン共和國を建設したのも、一つはこれがためであつて、英國當局が此の兩共和國建設の報を聞いて大に震撼したのは全くこの「赤化正攻法」「實物宣傳」の將來深く恐るべきを憂慮したからである。

## 六

ソウエート革命後の近東及び中東諸國は、かくして、その形勢を一變した。

- 一、前世紀來、ロシアとは歴史的讐敵と云はれてゐたトルコは、今や一轉して、ロシアの最も親善なる友邦となつた。
- 二、ベルシアにおける英露兩國の均勢が破れ、やゝもすればロシアの勢力が英國のそれを凌駕し、常にこれを牽制し、抑壓せんとするの勢ひがある。
- 三、全然英國の勢力圏内にあつたアフガニスタンは、ロシアの勢力をひきいれ、英國と對抗せしめ、ベルシアと同様、前者を以て後者を抑へんとしてゐる。
- 四、印度は從來、アフガニスタンを以て、對露前哨地としてゐたが、今や、ロシアの勢力の南下とともに、アフガニスタンは却つてロシアの對印度前哨地となつた觀がある。印度は直接その境邊に「赤化」の脅威を受けることゝなつた。
- 五、たゞ印度領域内における「赤化」革命は、さすがに英國が眞劍になつて防止しただけであつて、つひに成功するに至らなかつた。

かくして、近東及び中東諸國は、印度を除く外、どこでも、ロシアが一步を進め、英國が一步退いたかたちである。

しかし、一方、トルコ、ベルシア及びアフガニスタンは、鞏固なる反帝國主義の政府を建設して、その獨立を確立すると同時に、他の一方、印度における「赤化」革命の概して失敗に終るや、ソウエート政府は、殆んど一齊に近東及び中東の全局面に亘つて、積極的「赤化」政策をすて、消極方針をとり、「突撃」から「持久戦」に、「強襲」から「正攻法」に移つた。そして、攻撃の餘力はこれをあげて、極東に集中し、蒙古支那、殊に廣東に向つて、積極的「赤化」政策にとりかゝつた。

さきに西歐列強に向つて革命の強襲を企て、手強き抵抗に會して退却を余儀なくされたソウエート・ロシアは、その鋒先きを近東及び中東に轉じ、印度革命に向つて猛進した。そして、トルコ、ペルシア及びアフガニスタンでは、かなり奥深く前進したが印度において、英國の頑強なる抵抗に會し、持久戦に移らざるを得ないこととなり、ポリシエウイキーは、更らにその攻撃方面を極東に移して、支那に力を集注することゝなつた。最近二三年、ソウエート・ロシアの對外政策において積極的行動をとれるは主として、極東方面—支那—である。

## 十 内外蒙古の『赤化』

蒙古旅行の印象・半開國民と急進思想・土地所有の觀念なき蒙古牧民・蒙古革命の二大中堅—蒙古國民黨と蒙古青年革命團・蒙古國民政府とその政綱・大小國民議會・蒙古労働國民權・蒙古憲法・駐露蒙古大使との談話・露支蒙國際關係・露蒙修交協定・烏梁海國民共和國・蒙古の文化的「赤化」・蒙古鐵道密約説・變通自在のソウエート對蒙策・頓挫せる内蒙革命